

## 労研饅頭の社会文化史異聞

Several Important Facts of Social Cultural History about 'ROKEN-MANTO'  
(Roken Steamed Bun)

赤間道夫  
AKAMA Michio

### はじめに

労研饅頭旨し春遠からじ

愛媛新聞（小西昭夫選）に載った俳句である（松井征史作，2021年3月13日）。主題は、松山市民にはなじみで、また、松山の土産品として知られているもののひとつの、「労研饅頭（ろうけんまんとう）」である。労研饅頭は現在松山でのみ製造・販売されており、作者の幼少時の思い出だろうか、長年の労研饅頭への思いが伝わる地元ならではのこそ的一句である。

労研饅頭は、株式会社たけうち（松山市）の登録商標商品である。同社の労研饅頭商品紹介チラシや同社ホームページ冒頭にはこうある。

「昭和の初め、倉敷の労働科学研究所で中国の饅頭（まんとう）を日本人向けに改良して作ったのが始まりです。（改行）松山では、「夜学生に学資を」と松山夜学校奨学会で製造を始め各学校の売店などで販売していました。（改行）その当時から受け継がれてきた酵母菌を使って、甘みをおさえた素朴な味が自慢の手作りのまんとうです。」

ホームページでは続けて、倉敷労働科学研究所長・医学博士暉峻義等（てるおか・ぎとう，1889-1966）の「労研饅頭に就いて」（暉峻（1930））と関岡武太郎「労研饅頭」（関岡（1985）），さらには「（松山の老舗）手作りで素朴なふるさとの味 松山に労研饅頭あり」（『松山百点』）からそ

れぞれ引用し、1937（昭和12）年頃の労研饅頭配達風景と集合写真（家族と従業員）、包装紙を掲載しており、労研饅頭の歴史を一瞥できる。

かつては朝鮮半島を含む多くの地域で製造・販売されていた労研饅頭だが、いまでは唯一松山で90年にわたって継承される唯一の事例となっていることもあって、多くのエピソードとともに語られる稀有な饅頭となっている。

労研饅頭誕生の研究所である労働科学研究所（現大原記念労働科学研究所）の所長を務めた酒井一博はこう紹介している。「いま松山の繁華街に、労研饅頭という非常に大きな看板があります。この饅頭が作られたのは、戦前、暉峻義等が中国の食生活、栄養の研究をしていて、簡易に食べられ、栄養価の高い中国のまんとうの製法とその成分の分析をしています。義等らしい実学ですよ。それを論文にするとともに、職人を養成し、その種の利用を全国各地で認め、広めました。竹内という職人が戦後、松山で「労研饅頭」の店を興します。とても人気があるということです」（酒井（2009），20ページ）。

1931（昭和6）年10月創業の同社は、2021年10月に創業90年を迎え、地元紙誌では大きな関心をよんで受け止められた。

「松山のソウルフード「労研饅頭」が90周年独自の酵母菌と製法守り全国唯一の存在に」（松山経済新聞2021年10月20日付→<https://matsuyama.keizai.biz/headline/2528/>）および「労研饅頭90年」（愛媛新聞2021年11月7日付→<https://www.>

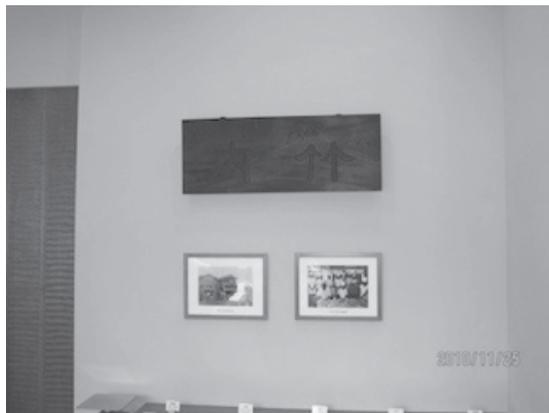
ehime-np.co.jp/article/news202111070005) がその例である。ほかに、松山の中央商店街の商店主が中心になって結成した松山百店会が発行する『松山百点』(2021)では90年を迎える労研饅頭を紹介している。同誌は以前にも、「倉敷大原家と愛媛のつながり「クラレ創業者」大原孫三郎・總一郎父子と二人の伊予人」(太田由美子(2018))を特集しており、大原家と南予出身で大原家の主治医・三橋玉見(松野町)および大原美術館初代館長・竹内潔眞[きよみ](宇和島市津島町)はそれぞれ松野町と宇和島市津島町の生まれでいずれも南予出身である。三橋の死後は長男の温が孫三郎の主治医をつとめ、次男の健は大原美術館の理事として總一郎の絵画蒐集を助け、竹内は柳宗悦の民芸運動を支援した。總一郎が倉敷絹織(現在のクラレ)社長時代には西条中央病院、西条栄光協会、愛媛民藝館の設立に関係した。「稀有な歴史をまとった

「労研饅頭」の写真付きコラム記事もある。

創業80年を迎える前年の2010(平成22)年11月には本店・工場を新築し、装いを一新していた(【写真1】)。のちに、第8回松山市都市景観賞(建築部門きらめき奨励賞)を受賞した(2013年)。「古くから続く趣を残した外観をもつ建物で、銅板で木材など伝統的な素材を上手く生かしたづくり」から「歴史を継承した考えを評価しました」とある([https://www.city.matsuyama.ehime.jp/shisei/machizukuri/toshikeikaku/keikan/syou/tosikeikan\\_8.html](https://www.city.matsuyama.ehime.jp/shisei/machizukuri/toshikeikaku/keikan/syou/tosikeikan_8.html))。

本店(松山市勝山町2丁目12-10)と大街道支店(松山市大街道2丁目3-15)があり、現在、味付け7種類(うずら豆、黒大豆、よもぎ味付け、ココア、レーズン、バター、チーズ)、あん入り7種類(つぶあん、こしあん、よもぎつぶあん、よもぎこしあん、白あん、かぼちゃあん、いもあん)の全14種

【写真1】新装オープン時の労研饅頭本店店舗(2010年11月25日, 筆者撮影)



類が販売されている（【写真2】）。ふるさと納税の対象商品（ふるさとチョイスおよび楽天ふるさと納税の記念セットおよび40個セット）にもなっている。

【写真2】現在の労研饅頭（たけうちホームページより）



地元紙愛媛新聞のコラム「地軸」には「労研饅頭90年」が掲載された。

「華やかな春でも、情熱を感じさせる夏でもない。俳人種田山頭火の俳句は、もの静かな秋にまつわるものに何ともいえない趣がある。「秋の夜や犬から貰つたり猫に与へたり」▲飾り気のない作風と、素朴で温かい味に通じるものがあつたのだろう。山頭火の日記には、松山名物「労研饅頭（原文では「ろうけんまんとう」のルビ入り）」を購入したとの記述が残る▲労研饅頭は、倉敷労働科学研究所（労研）が日本の食料問題解決を目指し、中国の饅頭（原文では「まんとう」のルビ入り）を改良。松山では松山夜学校が、学生の学資獲得のため、労研から製造法を学び作り始めた——との説明はもはや蛇足か▲その松山の労研饅頭が先月、90周年を迎えた。「ファンの皆さんに支えられて、なんとかやってこられました」と製造する「たけうち」の竹内信司社長。戦前からの酵母菌を使い、1個ずつ手作りする風景は昔と変わらない▲かつては昭和30年代、洋菓子人気に押され売り上げが激減したこともあつたという。それでも先代の両親が「細々でもいいから、昔からのお客さんがいる間は続けていこう」と踏みと

どまった。そのうち、自然食、安心安全への関心の高まりから客足が回復したそうだ。「商売のためだけなら、とっくにやめていたでしょうね」。新型コロナウイルス禍で苦境が続く今、90年の意味をかみ締める▲あの形、あの味には、労研饅頭は人々のためにあるという開発、創業以来の博愛の精神が息づく。なるほど、滋味深いはずである。（愛媛新聞2021年11月7日）

愛媛県と松山市におけるキリスト教の布教活動、救済事業・社会事業の展開と制度化、初等中等教育の発展など労研饅頭誕生には多くの重要で埋まってしまった歴史がある。たかが労研饅頭、されど労研饅頭。労研饅頭はただの饅頭ではない。「博愛」という「滋味深い」味を持った90年続く歴史から見えてくる労研饅頭のあれこれを描いてみよう。

## 1 労研饅頭

たけうちホームページに掲載されている「労研饅頭に就いて」（暉峻（1930））、関岡武太郎「労研饅頭」（関岡（1985））、「（松山の老舗）手作り素朴なふるさとの味 松山に労研饅頭あり」（『松山百点』）はそれぞれ労研饅頭誕生を端的に説明している。また、1937（昭和12）年頃の労研饅頭配達風景と集合写真（家族と従業員）、包装紙を掲載しており、労研饅頭の歴史を一瞥できる。

「夜学生に学資を…」と松山で作り始めた饅頭。本県では、昭和6年（1931）10月、松山夜学校奨学会ではじめて製造販売した。同奨学会では、向学心に燃える夜学生に学資を与える事業を探索中、たまたま伝道のため松山にきた倉敷教会牧師田崎健作から示唆を受け、これをとり入れることにした。当時の倉敷労働科学研究所長暉峻義等は、日本の食糧問題解決のため、中国人下層労働者の主食である饅頭を、日本人向きに改良、「労研饅頭」と命名し、すで

に京阪神において売り出されていたものである。同奨学会では、退役軍人で熱心なクリスチャンである数学教師竹内成一を責任者に選び、村瀬宝一（のちの六時屋タルト社長）を倉敷に派遣して製法を学ばせ、その酵母菌を譲りうけて持ちかえり、さらに中国人の林樹宝を招いて製造技術を学んだ。当初、一食分4個5銭。安価で栄養価が高く好評を博し、松山市内諸中等学校の売店、歩兵第22連隊の酒保にも販路が開かれるようになった。のち、この事業は竹内の個人経営に移るが、今も素朴な伝統の味を伝えている」(岡岡(1985), 654ページ)。**【補説1】**

#### 【補説1 大原孫三郎と3つの研究所】

労研饅頭はその名前に残されている倉敷労働科学研究所(暉峻義等所長)で開発された。倉敷労働科学研究所(現公益財団法人大原記念労働科学研究所)は、倉敷の大地主であり倉敷紡績の経営者(第2代社長)であった大原孫三郎<sup>1</sup>が設立した大原奨農会農業研究所(現岡山大学資源植物科学研究所)と大原社会問題研究所(現財団法人法政大学大原社会問題研究所)と並ぶ科学研究所のひとつであった。この3つの研究所は戦前・戦中・戦後を通じていずれも現在まで存続しており、とくに「大原社研と労研は、日本で最初の研究所であると同時に、戦前の研究所で今なお存続している例外的な存在」(二村一夫, 大原社会問題研究所創立90周年記念フォーラム)での発言、『大原社会問題研究所雑誌』第623・624号, 2010年9-10月, 38ページ)である。

もとより大原孫三郎は、岡山孤児院や石井記念愛園のような社会福祉事業や大原美術館や日本民藝館などのようなフィランソロピー活動にも熱心に取り組んだ。

1 大原孫三郎および関係した倉敷紡績所・倉敷紡績株式会社(現クラボウ)や倉敷絹織(現クラレ)については、兼田(2009)(2012-1)(2012-2)を参照されたい。ちなみにクラボウの「沿革」と「クラボウヒストリー」には本業だけでなく詳しいエピソードとともに、「大原社会問題研究所」を設立(1919年)、「倉敷労働科学研究所」(現「労働科学研究所」)開所(1921年)、「倉紡中央病院」(現「倉敷中央病院」)開院(1923年)、「大原美術館」開館(1930年)など多くの「社会貢献」にも触れている。また、「大原孫三郎人物伝」では「労働環境の改善」や「社会福祉・地域振興」に尽力したことを紹介している。

経営者として倉敷紡績株式会社(現クラボウ)を日本有数の紡績会社に発展させ、新たに倉敷絹織(現クラレ)を設立しただけでなく、銀行、電力会社、新聞社などの経営にも参画した。

#### (1) 大原奨農会農業研究所

3研究所のなかでもっとも早く設立された大原奨農会農業研究所は、大原孫三郎が約100町歩(約100ヘクタール)の土地を寄付し(のちにさらに100町歩が追加寄付)、「農民の福祉向上のため広く農事の改善を目指す私立の研究所」として発足した。

「深遠なる学理を研究し、これが実際の応用に依る農事の改善」を目的としたもので、「大原農業研究所は父(大原孫三郎:引用者注)が最も切実な期待をこめて作った最初の研究所」(長男の大原總一郎)である(岡山大学資源植物科学研究所「研究所概要」(→<https://www.rib.okayama-u.ac.jp/profile/profile-index/>)および「大原奨農会農業研究所 創設者 大原孫三郎氏について」から(→<https://www.rib.okayama-u.ac.jp/profile/profile4-1/>))。

母体になった大原奨農会は終戦後農地改革法によって資産が半減したため研究に要する一切の資産を新制の岡山大学に寄付し解散した。その後1957(昭和32)年遺留財産を資産として財団法人大原奨農会を設立し、さらに2014(平成26)年4月に公益財団法人大原奨農会に移行している(公益財団法人大原奨農会→<http://www.ohara-syonokai.or.jp>)。

#### ○ 大原奨農会農業研究所

- 財団法人大原奨農会農業研究所設立(1914(大正3)年)(初代所長:近藤萬太郎)
- 財団法人大原農業研究所に改称(1929(昭和4)年)
- 岡山大学農学部附属大原農業研究所になる(1952(昭和27)年)
- 岡山大学農業生物研究所に改称(1953(昭和28)年)
- 岡山大学資源生物科学研究所に改組(1988(平成16)年)
- 岡山大学資源植物科学研究所に改組(2010(平成22)年)

#### (2) 大原社会問題研究所

大原社会問題研究所は、1919(大正8)年2月、大原孫三郎によって創立された、社会科学分野では日本

でもっとも古い歴史をもつ民間研究機関であり、2019年に創立100周年をむかえた。大原社会問題研究所は、①社会・労働問題に関する調査・研究をおこなう機関、②専門図書館・資料館、③社会・労働問題の資料・文献情報センターという3つの機能を持ち、戦前からの資料と研究蓄積において日本有数の社会科学系民間研究所として知られている。

大原社会問題研究所設立の母体になったのは、財団法人石井記念愛染園救済事業研究室であり、救済事業研究所と社会問題研究所の2研究所を合併したのが大原社会問題研究所である。前者は週れば主宰者だった石井十次の死後（1914年）、岡山孤児院の院長になった大原孫三郎が大阪に開設した「愛染橋夜学校」「愛染橋保育所」「日本橋同情館」という岡山孤児院大阪事業というセトルメント型事業であった（1909年7月）。さらに岡山孤児院から切り離し新事業として設立されたのが石井記念愛染園であった（1917年3月）。

こうして誕生した大原社会問題研究所は創立の翌年、『日本社会事業年鑑』（1920年5月15日刊）、『日本労働年鑑』（1920年5月28日刊）、『日本社会衛生年鑑』（1920年6月10日刊）という3つの年鑑を発行した。『日本社会衛生年鑑』は第3集（大正11年版）で、『日本社会事業年鑑』は第7集（大正15年版）で終了し、『日本労働年鑑』のみその後出版される。このうち『日本社会衛生年鑑』は、暉峻義等が率いていた社会衛生部門が倉敷労働科学研究所として独立し（1921年7月）、発行が継承された。また、『日本社会事業年鑑』は『日本労働年鑑』に内容吸収された。

#### ○ 大原社会問題研究所

- 1919（大正8）年2月9日設立（初代所長：高野岩三郎）
- 東京市淀橋区（現新宿区）柏木に移転（1937（昭和12）年2月）
- 財団法人法政大学大原社会問題研究所設立（1951（昭和26）年1月）
- 法政大学付置研究所となる（1986（昭和61）年4月）
- 『大原社会問題研究所100年史』刊行（2020（令和2）年3月）

#### (3) 倉敷労働科学研究所

倉敷労働科学研究所は、大原社会問題研究所とともに大原孫三郎の発案によって設立された。大原救済事業研究所社会衛生部門がそれであり、すぐに社会問題

研究所と合併し、社会衛生部門も大原社会問題研究の一部門となった（1919年7月）。社会衛生部門の中心を担ったのが暉峻義等である。倉敷労働科学研究所となるきっかけになったエピソードが知られている。「1920年2月に暉峻が倉敷を訪問し、大原孫三郎に案内されて深夜作業中の紡績工場の労働状態を視察したことであった。2メートル先もよく見えないほどのほこりの中で睡魔とたたかいながら働いている少女たちの姿に驚く暉峻に、孫三郎は労働環境を改善し、女工の健康状態を良くするための研究をしてほしいと依頼したという。感動した暉峻はこれを受け、その場で倉紡万寿工場の敷地内に研究室の設置が決定された。同年暮、大原社研社会衛生部門の独立がきまり、翌1921年7月に倉敷労働科学研究所は正式に発足したのである」。

大原社研が「アカデミックな理論研究」に重点をおいたのに対し、労働科学研究所は「疲労研究や労働環境の改善をはかるための実際的な研究、生産現場における具体的な問題解決」を志向していた。

#### ○ 倉敷労働科学研究所

- 1921（大正10）年7月1日設立（初代所長：暉峻義等）
- 『労働科学研究』創刊（1924（大正13）年6月）
- 『労働科学研究所年報』創刊（1925（大正14）年6月）
- 労研饅頭試食会（1929（昭和4）年5月）
- 大原孫三郎の個人経営に移る（1930（昭和5）年6月）
- 図書館設立（1932（昭和7）年1月）
- 倉敷労研創立15周年記念（1936（昭和11）年7月）
- 倉敷労研解散式〔大原孫三郎若干の維持費をつけて日本学術振興会に寄託、東京移転（1936（昭和11）年11月）〕
- 日本労働科学研究所設立（所長：暉峻義等）（1937（昭和12）年1月）
- 開拓科学研究所（満州）設置（所長：暉峻義等）（1939（昭和14）年）
- 東京市世田谷区祖師谷2丁目に移転（1939（昭和14）年12月）
- 大日本産業報国会に統合される（1941（昭和16）年10月）
- 暉峻義等、大日本報告会労働科学研究所長に就任（1942（昭和17）年1月）
- 大日本産業報国会解散にともない労研も解散

(1945(昭和20)年9月)

- 財団法人労働科学研究所として再建(1945(昭和20)年11月)
- 川崎市に移転(1971(昭和46)年4月以降)
- 公益財団法人労働科学研究所(2012(平成24)年4月)
- 公益財団法人大原記念労働科学研究所として東京都渋谷区に移転(2015(平成27)年9月)

松山城南高等学校編(2001)は「(1931(昭和6)年)10月10日松山夜学校奨学会発足「満禱団」による労研饅頭の製造開始」(51ページ)としている。「満禱団」の名称は、松山城南高等学校編(2000)、39ページと引用した松山城南高等学校編(2001)、51ページで確認できる。この名称を使って当初「労研満禱」としたことを伝えている(後述)。

関岡は、「松山夜学校本科一年第二学期末考查を在學生と同時に受験、合格し入学を許可される。校祖ジャドソン(ママ)に教を受け」た(関岡(1991)、18ページ)。松山夜学校卒業後(1931年(昭和6)年)、同志社大学文学部神学科を卒業し(1940(昭和15)年3月)、母校の当時松山夜間中学の教員になった生え抜きである。関岡(1991)によれば、松山夜学校卒業後松山夜学校の書記として1年働いて同志社専門学校神学部(別科)に入学している(1932(昭和7)年)。初代校長西村清雄から同志社卒業後は松山夜学校教員として帰ってくるよう懇請され、教員免許状取得のためには大学卒業が必要であり、大学に入学するためには専門学校(正科)を卒業しなければならず、さらに専門学校(正科)に入学するためには中学校を卒業しなければならなかった。そのため関岡は一端同志社専門学校神学部(別科)を休学し、京都中学校第4学年に編入し、1936(昭和11)年3月同中学校第5学年を卒業した。同年4月に同志社専門学校神学部正科生として第4学年に復学し、翌年卒業した。そして同志社大学文学部神学科に入学し(1937(昭和12)年3月)、1940(昭和15)年3月

に卒業し、ようやく松山夜間中学の教員になった。労研饅頭の「製造販売は1931(昭和6)年10月」当時、関岡は松山夜学校書記であり、労研饅頭誕生の生き証人である。母校の第3代校長(1958(昭和33)年11月1日~1965(昭和40)年3月31日)をつとめた。旧松山城南高等学校(現松山学院高等学校)校歌の作詞をしたことでも知られている。「本校には西村(清雄:引用者注)現名誉校長作の立派な校歌があるが、それは定時制のものであってそのま(ま:引用者追加)では全日制高校の生徒に歌えない言葉がある。そこで全日生高校に校歌がほしいと云う声は既に久しい。そこで校歌作制委員会を設け、協議の結果私に成(ママ)作せよとの事である」(関岡(1991)、191ページ)と記録している。歌詞の意味についても触れている。

ここには労研饅頭の簡潔にして要を得た歴史が記述されている。ただ、労研饅頭誕生の歴史にはわが国の1930年代(昭和初期)の社会経済事情による労働事情や食料・健康問題、論壇の一端のほか、これまであまり触れられてこなかった社会文化的側面がある。

## 2. 労研饅頭は合理化食か主食代用食か：労研饅頭の社会史

労研饅頭についてはふたつの相反する評価がみられる。そのひとつは一時巷間に流布した労研饅頭=女工搾取のための合理化食論である。

「倉敷紡績では、女工の搾取戦術を研究するために、労働科学研究所を作らせ、労研マンジュウ(饅頭:引用者注)というものを発明させた。女工が朝起きてフトンをあげ、顔を洗い、髪をゆい、食堂に出て朝食をして、それから工場に出て仕事につくのでは二時間はかかる。資本家にとってそれは莫大な損失である。そこで、女工が朝起きて顔を洗うと、さっそく点検してその場所で労研マンジュウを配給する。女

工たちは、そのマンジュウをほおぼりながら髪をゆい、それを食べながら工場に出て仕事につく。それだけで一時間はもうかるというのである。こうして女工たちが一時間早く仕事につくことによってボロもうけするのは紡績資本家だけである。ところがそうした搾取方法がそれにとどまらず、工具に減私奉公を強迫した労働強化や日本の民衆を餓死に追いこんだ、一合八勺の配給米のもとであったという」（宮本他編（1961・1972・1995）、165ページ）。

この文章は、安田徳太郎の著書の一部をもとにしてしているとみられる。安田一郎は「安田の（安田徳太郎の：引用者注）この論文のこの箇所は宮本、山本他『日本残酷物語、近代の復権』5巻、1961年（平凡社ライブラリー112番として復刻）（宮本他編（1961）を指す：引用者注）に引用されている」（安田（2001）、417ページ）としているが、宮本他編（1961）は引用したことをどこでも明記しておらず引用符もない、安田徳太郎の文章そのものと言っていい。宮本他編（1961・1972・1995）は27名の執筆協力（執筆）の原稿をもとに、「編集部が大幅に再構成・リライトした」（扉裏）とあり、労研饅頭箇所を含む「第一章 根こそぎにされた人々」の「女工の青春」の原文作成者は不明である。

「私は『中央公論』に「医学の階級性」という論文を出したことがある。このなかで、私は当時流行した資本家攻勢の産業合理化問題にふれて、大原孫三郎の倉敷紡績会社では女工の搾取戦術を研究するために、暉峻義等という衛生学者に労働科学研究所なるものを作らせ、「労研饅頭」なるものを発明させた。女工が朝起きて布団をあげ、顔を洗い、髪を結び、食堂に出て飯を食って、それから工場に出て、仕事につくまでは二時間は食われてしまう。資本家にとってはそれこそ「時は金なり」である。そこで、この貴重な時をかせぐために、女工が朝起きて、顔を洗うと早速点呼して、その場で「労研饅頭」を支給する。女工はその「饅頭」をほ

ほおぼりながら、髪を結び、それを食べながら工場に出て、早速仕事につく。それだけでゆうに一時間はもうかる。「労研饅頭」はそこいらの紡績工場の朝飯よりもカロリーは高いし、栄養も多い。なにしろ、労働科学研究所長が発明された世界に誇るべき代物である。ところで、女工諸君が「労研饅頭」をほおぼって一時間早く仕事につくことによって、ほろもうけするのは、大原孫三郎という紡績資本家だけである。その儲けから割り出せば、労研の一握りの「番犬」どもを養う費用などは高が知れている」（安田（2001）、415～6ページ、初出は『医学の階級性』アテネ文庫（弘文堂）、1948年7月）。

引用文にあるように安田はすでに「医学の階級性」（『中央公論』1930年7月号、安田（2001）所収）で「医学者も医師も、その科学をもってブルジョアに奉仕しようとする。ある衛生学者がわざわざ「労研饅頭」というものを作り、ブルジョア新聞を通して社会に発表した。（中略）産業合理化に狂奔する資本家は、この忠実な学者の発明を賞賛するのは至極当然である」（安田（2001）、254ページ）と断じていた。

安田が「ある衛生学者がわざわざ「労研饅頭」というものを作り、ブルジョア新聞を通して社会に発表した」と書いていることにたいし、安田一郎は「これを確認するため、1930年5月以前の大阪、および東京朝日新聞を調べたが、該当する記事は見つからなかった（京都か大阪の地方紙かもしれない）」（安田（2001）、416ページ）と注記している。松山の「たけうち」の創業者である竹内成一は「まんとう小言」にこう書き残している。「同博士（暉峻義等：引用者注）は日本の食糧問題に就いて深き責任を感じて居られた折から苦心に苦心を重ねて研究された労研饅頭の製法が比較的簡単であるので家庭で誰にでも手軽に製造が出来るようにとの御希望で当時パンフレットを発行して其製法を公表された（後略）」（たけうち（1991）、18ページ）。「パンフレット」が「ブルジョア新聞」で紹介された可能性もあるが、筆者もまた「ブルジョア新

間」の特定とその内容を確認できていない。いずれにしても、「労研饅頭」は、資本家・大原孫三郎が「搾取戦術を研究する」ため労働科学研究をつくり、所長の暉峻義等が労働時間搾取のために発明した、というのである。

医師の若月俊一も同様の趣旨の発言を残している。「労研が「労研まんじゅう」を紡績工場の女工さんにたべさせてですね、ごはんを食べる時間を少なくし、あったかい味噌汁を食べさせないですますいわゆる「合理化」をしたなどは、明らかにまずいのじゃないでしょうか」（若月（1969）, 68ページ）。安田の「医学の階級性」が戦前から一定の影響をもつて受け入れられていたことを示す例である。安田一郎は安田徳太郎の主張の本意は「労研饅頭」そのものではなく、「まんじゅう」のような手軽な食事によって食事の時間がさらにけずられ、逆に労働時間がふえ、その結果労働者が搾取されるということであった（それは、暉峻が意図したものでなかったにせよ）」（安田（2001）, 70ページ）としたうえで、当時の過酷な女工労働の実情について敷衍している。「当時は紡績工場の女工は寄宿制であり、自由は限られ、また労働時間は10時間とか12時間というように、きわめて長かった。細井和喜蔵の『女工哀史』はこの時代の紡績女工の記録であるが、それによると、休憩時間は9時、3時が15分、12時が20分であった。しかし機械の掃除とか、次の段取りで15分位はすぐにたち、休憩時間はないのも同然だった。それで通勤女工は弁当を食べながら仕事をしたという。当時寄宿女工の一日の食費は9銭、多くて15銭であり、連日ダイコンのみそ汁とたくあんであり、月に2、3回塩鮭が夕食にただけであった」（安田（2001）, 416～7ページ）。

1928年倉敷紡績万寿工場に女工の教化係として就職し、1930年11月の倉敷紡績全工場ストライキで誅首された棧敷よし子の回想は経営者・大原孫三郎について触れている。棧敷は暉峻義等と教化係の時に知り合い、その後の就職

では紹介状を書いてもらった。宇和島の愛媛県農村結核予防模範地区指導所で看護婦として勤めている時に、松山に来た暉峻に兼務していた満州開拓科学研究所の満州開拓団の結核予防業務に誘われ従事し（1944年8月）、戦後も長く中国に留まり（13年間）、1958年5月の第19次引き揚げで帰国した。

「その間に学んだことは、紡績婦人労働者の団結の素晴らしさ及び大原美術館や、中央病院、そして労働科学、社会問題、農業科学の三研究所をもった、先代社長、大原孫三郎氏の奇妙な業績も個々の善意も、明治中期からの一紡績資本家として、貧しい農村から日本特有の人買いにも近い募集員制度の下で酷薄な搾取を土台にしたものであり、笑いの止まらない儲けの一部を社会進歩に役立てたに過ぎないということであった」（棧敷（1983）, 38ページ）。「資本主義社会での階級矛盾は、個人ではどうする事も出来ない鉄則で回る歯車であること。資本家個人の善意とか温情などは、もうけ主義の恥部をおおう“いちじくの葉”に過ぎないことなどを思った」（同上, 49-50ページ）。棧敷は、「酷薄な搾取を土台にした」会社の経営者・大原孫三郎と（彼のもとで労働科学研究所長だった）暉峻義等を意識的に区別している<sup>2</sup>。

棧敷の議論は、労研饅頭と大原孫三郎および暉峻義等を、ふたりが推進した労働環境の改善に触れることなしに「階級性」で断じており、一面性を免れないだろう。

この労研饅頭＝女工搾取のための合理化食論

---

2 棧敷については、ほかに札幌女性史研究会編『北の女性史』（北海道新聞社、1986年）や棧敷とともに「地下活動」とともに、松山郊外の愛媛県立結核療養所翠松園で再会した桑原武英著『治安維持法とわたし——不屈の抵抗と青春を語り継ぐ——〈戦前編〉』（日本機関紙出版センター、2007年）が詳しい。また、「棧敷よし子を追っかける」プロジェクト編「ジョゼ in 北海道：棧敷よし子を追いかける旅01（本編）」がある（→<https://www.youtube.com/watch?v=EKQw3JVZgR4>）。

にたいして、戦前に労働科学研究所に入所し、副所長をつとめた三浦豊彦(1913.11.24-1997.12.31)は何度か反論している(三浦(1962・1976・1980・1991))。「労研が、この饅頭で倉敷紡績の女工を搾取する片棒をかついだのだという話が伝わっていて、とんだ濡れ衣をきせられている」(三浦(1991), 162ページ)としてうへの宮本他編(1960・1979・1995)と若月(1969)からの引用をしたうえで、「大分悪意に満ちたもので、実情をよく知らない人は、ほんとうのことかと思う人があるかも知れない」・「若月も実際に倉敷へ行って、労研饅頭を朝食代わりに食べさせていたことが事実であったかどうかは、しらべていなかったはずである」(三浦(1980), 209～210ページ)と。あわせて、労研饅頭＝女工搾取のための合理化食論の原型は安田(2001)(初出は『医学の階級性』アテネ文庫(弘文堂), 1948年7月)にあるとし、倉敷労働科学研究所の設立に関わり、戦後直後に労働科学研究所長をつとめた桐原葆見(しげみ)(1892.11.10-1968.5.2)<sup>3</sup>の文章を引用している。

「労働科学研究所は昭和の初頃から中国東北地区における鉱工業や農業における労働と労働者の生活とについて調査研究をするようになって、後には彼地に支所や分室を設けたのであるが、かねて国民栄養に関心を持っていた暉峻義等は、彼地から林宝樹(樹宝の間違い：引用者注)という調理人を連れて来て、先ず所員の毎日の食事を調理させて試食しながら、わが国の工場や農村の栄養改善のヒントを得ようとした。たまたま彼の作る饅頭の栄養価が、当時は銭貨と称して、他の米やうどんや食パンなどと比べて最も安かった。何しろ世界的不況のどん底で、メリケン粉1袋が2円50銭であったから、これで饅頭を作ると、1個60グラムで162.2カロ

リーあって、これが1銭で出来る。これを1.2～1.25銭で売れば十分引き合うので、それは米その他の何よりも安かった。その上製造に別の酵母を使わないで簡単である。そうして軽便に食える。これを主食の代用にすれば、4個で約650カロリーがとれるから、1日2,400カロリー以下の消費熱量でやれる労働者のベントウの主食代用に最も有利で便利である。というのがこれのみそです。そこで4個5銭を小売の定価として、上記の規格条件をもつものに労研饅頭という名称を与え、これを業者が商標登録して市販に出した。(改行)失業者が街にあふれるといった当時のことで、伝え聞いてその製造販売を望む人が各地から問合せて来たので、競争をさけるために1都市1人に伝授して認可することにし、岡山、倉敷をはじめ、東京、福山、松山など各地に1袋4個5銭の労研饅頭が出まわったのである。しかし、どこでも主に学校生徒と下級サラリーマンの中食代用に専ら買われて、工場労働者や一般の人々からは、軽くて腹の支えにならないとか、あんのない饅頭とはベラボウな、かねのない財布みたいだというわけで、間食とも評判が悪くて、工場でこれを主食に代用しようなどとは考えてもらえなかったようである。しかし、これを主食として、副食に中国の労働者街でざらに見るように、豚の足やしっぽや骨を大鍋に入れてたき込んだスープに生ねぎの青みと塩をいれたのをそえて食べばとても良い食事になったのだが。(改行)その後小麦粉の値が上ったり、お得意の希望をいれて、まるの黒大豆を添加したりして、規格がくずれ、ついに労研饅頭ならぬ労饅になってしまった。(改行)というわけで、結局労働者をさく取することには全く使われないで、少数ではあったが失業者に新職場を提供したことになったが、わが国の労働者の栄養改善に一役かうところまでは行かなかった」(桐原(1962), 13ページおよび三浦(1980), 210～212ページ)。

みられるように、労研饅頭は「さく取」どこ

3 生家である浄楽寺(広島市安佐南区)に「財団法人労働科学研究所」が建立した「桐原葆見先生誕生百年記念碑」がある。

ろか当初企図した「わが国の工場や農村の栄養改善」・「わが国の労働者の栄養改善」や「主食の代用」には結びつかず、「少数ではあったが失業者に新職場を提供」し、もっぱら「学校生徒と下級サラリーマンの昼食代用」として普及することになった。三浦は当時の事情をこう書いている。「当時、労研所員だった勝木新次は、昼食を労研饅頭と牛乳ですませたこともあったが、合わせて10銭、これにバターを加えるとさらに高価になる。ところが当時、倉紡の工場内の売店では「うどんかけ」が1杯2銭で、大きな甘藷の精進揚げをのせても1銭加わるだけだった。つまり労研饅頭は女工さんには手の届かぬ高価なものだったと語っている」(三浦(1991), 164～5ページ)。

### 3. 労研饅頭の誕生

労研饅頭誕生については、資料が残っている。三浦は、暉峻義等が産業衛生協議会第2回総会(1929(昭和4)年11月7日)の休憩時間に労研饅頭を紹介したことを紹介している。

「議長 時間ノ都合上討議ヲ打切り休憩ヲ宣ス、時ニ午後3時頃  
此ノ間暉峻氏労働科学研究所労研饅頭ヲ紹介シ、予メ会員一同ニ配布セルプリントニ就テ説明ス」(「第2回産業衛生協議会総会紀要」『労働科学研究』第7巻第1号, 1930年, 194ページ)

三浦は、「この第2回総会でおそらく、会員は饅頭を味わったと思われる」(三浦(1991), 161ページ)と書くが、試食の有無はともかく暉峻が紹介し説明に使った内容が暉峻(1930)だろう。全文そのまま引用する。

「労研饅頭に就いて  
倉敷労働科学研究所長  
医学博士 暉峻義等  
一、労研饅頭の由来

倉敷労働科学研究所で造り出した饅頭は、もともと満州人が主食としている饅頭<sup>マントウ</sup>からヒントを得たものである。私の二回に渉る満州への旅で、いろいろとその製法に就て学び、これを研究所で造って見たが、どうしても出来がよくない。それで意を決して大連から饅頭製造に慣れた林樹宝君を研究所に呼びよせて、本格的な製造研究に進んだのであった。(改行)満州人の常食としているものそのままの製法や形では日本人の嗜好や趣味に適しない、林君が着任してから、いろいろと製法や技術上に苦心した結果、その味や形に於て吾々日本人に親しみのあるものとなるまでには相当の時日を要したのであるが、遂に「これならば」と思われる吾々の饅頭が出来上るに至った。

#### 二、労研饅頭の主食代用品としての栄養価値

主食代用品としての「労研饅頭」と、各種主食並に主食代用品との間の各食素含有量の比較は左表の如くである、「パン」とほとんど相似しているのは、その材料を一つにするためであること勿論である。またこの分析表に於て「パン」及び「労研饅頭」が主食品並に主食代用品に比して優秀なる結果を示すのは、勿論、食物そのものの組成にもよるが、一つには食物中の水分含有量の差異に基くものである」(暉峻(1930))<sup>4</sup>

倉敷市史研究会編(2004)はこの間の事情をこう説明している。「栄養思想の普及と実践活動の具体例として、労働者の蛋白質代謝を研究することで国民の栄養問題にも着目して「労研饅頭」の名の蒸しパンを開発し、林源一郎が製造販売したことは有名である」(池田直人執筆, 492ページ)とし、「倉敷労働科学研究所は倉敷市域の人々に労研の名で親しまれているとともに、労研の研究成果は十分に根付いている様

4 たけうち(1991)のほか、たけうち「労研饅頭の由来」(→<http://home.e-catv.ne.jp/takeuchi/sub1.htm>)でも確認することができる。

各種主食分析表(倉敷労働科学研究所生化学研究室分析)

種別		蛋白質	脂質(注1)	含水炭素	備考
二等白米飯		2.41	0.15	30.49	栄養研究所第1巻第1号杉本好一氏論文ヨリ
半搗米飯		3.09	0.50	27.97	同上
麵麩(注2)		6.81	0.54	57.80	食物辞典沢村眞氏ヨリ
饅頭	煮タモノ	4.86	0.10	25.93	同上
麦飯	麦三合 米七合	3.23	0.71	29.16	労働科学研究所ニテ分析セリ
饅頭	生	2.99	trace	19.79	同上
労研饅頭	労働科学研究所製	6.516	0.568	58.13	同上
支那饅頭		14.70	1.29	69.25	昭和2年暉峻氏が満州ヨリ携へ帰りタルモノデ成生後日数ヲ経テ居ル為メ水分含量11.13%トナリ、他養分量ガスクモトナリシモノデアル

(注1)原文は「胎質」となっているが、「脂質」の誤植か。

(注2)「パン」と読む。

を見て取れる」(同上)として、倉敷市生産品展覧即売会の開催記事(1932(昭和7)年3月下旬)を紹介している。

「労研まん頭と公民学校のからし漬、農研加工場の漬物、理詰めて出来て居らふと推想されるか、八張労研まん頭か一番よかるふ、之は用易くして其の効の大なる点を指して例証するわけに外ならぬ(同上)

松山での労研饅頭の「製造販売は1931(昭和6)年10月」とされるが、倉敷ではすでに労研や労研饅頭が人口に膾炙していたことがわかる。いまひとつ注目しておきたいのは、労研饅頭指定者組合の役割についてである。「研究所が開発した「労研饅頭」の普及運動は、昭和6年後の満州事変下の時局匡救事業・農山漁村経済更生運動の一環として「食糧問題解決」の国家的事業として指定者組合を通じて行われた」(坂本忠次執筆, 687ページ)としている。労研饅頭指定者組合は労研饅頭の製造販売を独占的に担う組織であり、かならずしも労研饅頭の普及を目的としたものではない。現時点で労研饅頭

の普及運動が「時局匡救事業・農山漁村経済更生運動の一環として「食糧問題解決」の国家的事業」だったことを示す史資料を発見できていない。

松山の「たけうち」創業者の竹内成一が書き残している「労研饅頭一地方一軒」説に与しておきたい。「何種のものに限らず評判のよいものには模造品や偽物がついて廻るものである。其種類が多い程、真価の高いことを証明している。労研饅頭も亦御多聞に洩れない、或る地方では其偽物五六種に上ったと言われている、然し倉敷労働科学研究所指定の製法により同所より分譲された酵母を使用し且つ其監督を受けて製造している店は一地方に一軒しかない、此点読者のご承知を願いたい」(たけうち(1991), 18~19ページ)と。

以上のことを裏付ける資料がある。岡山県和気町にあった森本香栄堂(大正初期から1986(昭和61)年まで営業)旧蔵の「労健饅」のゴム印には「主食代用 カリシウム入 労健饅 壺食 四個入金五銭 和気森本香栄堂」とあり、労研饅頭人気にあやかっただ商品製造販売していたことがわかる(猪原(2019)②, 41~42ページ)。

また、地元紙でも偽労研饅頭が課題になっていたことを伝えている。「偽ローマンを征伐いよいよ声価を高めるために労研饅頭指定業者全国大会 倉敷労働科学研究所長暉峻義等博士の創製にかかる簡易栄養食料「労研マントウ」はすばらしい人気で全国に普及し、指定業者組合の組織も出来ているが、品質劣等の偽ローマンが現はれたり配合の相違したものが出来て折角の声価を低下させる心配もありこれらを防止する旁々労研マントウの発展向上を測るために来る22日倉敷市に労研マントウ指定業者全国大会を開催する運びとなった、当日は組合長原澄治氏をはじめ倉敷市の林源十郎、日下公平氏その他全国から7, 80名の組合員が参加、事務的行事のほかに労研側から労研マンに関する根本解説をして一同に徹底せしめ、なほ戦場食料としての価値についても研究発表が行われる予定である」(山陽新報, 1935(昭和10)年10月15日付, 猪原(2019)②, 42ページから孫引き。林源十郎と日下公平については後述する)。

#### 4. 労研満禱説

労研饅頭はその名前の通り、労研つまり労働科学研究所で開発された饅頭である。ところで、労研饅頭は松山夜学校にできた奨学会の名前が由来だとする話が伝わっている。

「竹内成一は彼に(野本教男に: 引用者注) 数学(ママ: 数学の間違いか)を教えた。竹内は生徒がよく理解するまできちんと教えたので、彼は帰省するとよく彼を訪ねた。あるとき、竹内が夜学生のために奨学会制度をつくりたいという話を聞き、彼は夜学生ができる仕事について考え、竹内に倉敷の「労研饅頭」を導入することを提案した。当時、倉敷労働科学研究所で満州人が主食としていたものを取り入れ、日本人の食べ物になるようにと研究がなされ、「労研饅頭」づくりが始まっていた。竹内はしっかりとした構想をたて、祈りつつこの事業をすすめた。そして満禱団(強調は原文)と名付けられた

奨学会がスタートし、労研満禱(後に労研饅頭となる)(強調は原文)が製造されるようになった。それが今も竹内家でうけ継がれて69年の歴史を刻んでいる。全国でも珍しいものとされている。この労研饅頭のルーツはやはり母校愛に根ざした祈りが実を結んだところにあったことが分かる」(松山城南高等学校編(2000), 39ページ)。村瀬五十子も、奨学会事業部として満禱団が発足し、竹内成一部長、村瀬(旧姓石垣)五十子事務担当、生徒9名からなり、村瀬宝一が「松山夜学校奨学会事業部設立と共に満禱団に入り製造主任とな」ったと証言している(村瀬五十子(1991), 21ページ)。村瀬は満禱団の設立が「主食代用の労研饅頭と名付けられた怪しげな食物」(同上)の製造販売にあったことを明言している。

さらに、労研饅頭が満禱団と無関係だったわけではない。当時小学生だった西村拓(松山東雲中・高校第7代校長、松山城南高校第7代校長)が「松山夜学校(城南高校)に、勤労青少年のための事業部(満禱団=労研饅頭製造の意味と祈禱に満ちたグループの意を兼ねる[強調は原文圏点])が設けられて、(村瀬が: 引用者注)その製造を受け持たれた(後略)」(村瀬五十子(1976), 53ページ)と語っているように、満禱→饅頭ではなく饅頭→満禱であることを暗示しており、労研饅頭が製造・販売することにともない奨学会事業部に饅頭にかけた満禱団を結成したことがわかる。

労研饅頭は松山夜学校では一時奨学会の名前から労研満禱と呼ばれたことがある可能性を示唆していようが、暉峻義等(1930)が示すように、労研饅頭の名前がすでに存在しており、この定説を覆す資料はほかにない。ただ、松山での労研饅頭誕生史に名前が挙がっていた、竹内成一、田崎健作、暉峻義等、村瀬宝一、林樹宝以外にも松山夜学校出身で同志社に学んでいた野本教男の関わりを発見できた。松山城南高等学校編(2000)には「1927(昭和2)年3月22日本科を卒業して同志社神学校に学んだ」(39ページ)とある。だが、「母校が創立40周年を

祝い、労研饅頭が松山夜学校で製造開始された年、即ち1935（昭和10）年」（39ページ）とあるが、おそらく1931（昭和6）年の間違いであろう。松山夜学校創立40周年記念祭は1931（昭和6）年10月16日に開催され、初代校長の西村清雄の談話が残っている（愛媛新聞1931年10月17日付）。「本校からジャジソン女史という大人格者を失うことは甚だ遺憾であるが、然し女史の停年のためやむを得ぬ。そこでこれを記述する改革案を立てていたが、大体工費5万数千円で校庭の拡張と校舎の増築並びに従来の中学を甲種商業学校に改め、時代にかがみだ最も労作教育に力を盡す考で既に、労働化（ママ） 学研究所の諒解を得て労研饅頭の製造を初（ママ） めています当く松山市を中心に道後平野の一円の一手販売をすることにして居ります」（同上、47ページから孫引き）。1931（昭和6）年10月にはすでに労研饅頭の製造・販売を始めており、松山市内や道後平野にも販路拡大の予定があることを確認できる。

## 5. キリスト教と儒教による女子中等教育の実現

さて、伊予の地へのプロテスタント伝道は、アメリカン・ボードのJ・L・アッキンソンと摂津第一基督教公会の会員（鈴木清と小野俊二）とによる1876（明治9）年春の松山での伝道旅行を嚆矢とする。これ以降、今治教会、松山教会、伊予小松教会が次々に設立された。松山教会は、今治教会の伝道師二宮邦次郎が松山に定住し、組合教会松山第一基督教教会を設立し（1885（明治18）年1月28日）、二宮が初代牧師に就任した<sup>5</sup>。この教会によって設立されたのが松山女学校である（1886（明治19）年）。

5 教会地とした場所は当時大街道一丁目にあった（現在は三番町一丁目に移転）。松山藩時代には大法院という寺で、巽小学校の土地・建物を利用した。この建物は戦災で焼失した。教会前には作家・桜井忠温の生家（一時喫茶店「こまどり」）があった（池田洋三

「東雲高等女学校は昭和7年、文部省から女学校の認可を受けるまでは私立松山女学校といった。松山で初めて教会を開いた伝道師二宮邦次郎が明治19年に創立した。現在の場所に落ち着いたのは大正9年である。それまでは二番町に学校はあった。もっと以前にさかのぼると、スタートしたのは出淵町の借家である。その後、一番町を転々、二番町時代は明治23年から大正8年までである。女学校としては四国で一番古い」（池田洋三（1975）、29ページ、池田洋三（2002）、37ページ）。現在東雲学園がある場所は、藩政時代の家老水野氏の屋敷があり、明治8年に県立松山病院、大正2年に赤十字病院になる。東雲女学校は赤十字病院が二番町に移転した後の大正9年にこの地に建てられた。移転と同時に招聘されて3代目校長となったのがオリーブ・S・ホイテ（1874-1966）である。ポートランド出身で、イリノイ大学およびコロンビア大学などで学位を取得後明治35年に来日し、神戸女学院で理科教師などを務めた。戦中に一時帰国後戦災で焼失した学校の復興再建に尽力した。愛媛の女子教育への貢献によって勲四等宝冠章を受賞後帰国した。

松山女学校の後身である東雲学園（松山東雲女子大学および松山東雲短期大学）には、二宮邦次郎を記念した「二宮邦次郎賞」がある。さらに、女子教育倶楽部の設置による女子教育や松山監獄での伝道のほか、廃娼運動にも取り組んだ。松山夜学校内に施療院を設置したことも特筆されよう。

もちろん、松山での女子教育の普及はひとりキリスト教に負うものではない。松山で漢学塾を開き、就業年限3年の明倫学舎を開設後

（1975）、14～15ページ、池田洋三（2002）、18～19ページ。池田洋三（1975）および池田洋三（2002）には戦災で焼失した昭和6年に建てられた3階建ての校舎ピラス館（家政館）の写真が掲載されている（28ページおよび36ページ）。池田洋三（2002）には最初期の建物前（「基督教会堂」）の写真（19ページ）と、大正後期、正面側から見た松山女学校の写真（38ページ）がある。

(1880(明治13)年), 上京して男女共学の翠松学舎創設(1887(明治20)年)を経て, 三輪田女学校(直後に三輪田高等女学校, 現在の三輪田学園中学校・高等学校)を創設し(1902(明治35)年), 儒教を基本に「徳才兼備の女性の育成」を提唱した三輪田眞佐子を忘れることができない。三輪田の夫元綱の兄は三輪田米山である。ちなみに, 三輪田眞佐子(2005)に収録されている「三輪田学園百年史」には, 翠松学舎開塾当時の教員7名(大部分が愛媛県師範学校あるいは明倫学舎での教え子)のひとりとして高須賀伊三郎(のち改名して稷)の名がある。「当時23歳。明治18年に愛媛県師範学校を卒業, 小学校の教員となり, 明治23年3月辞職, 上京している」(三輪田(2005), 115ページ)とある。【補説2】

#### 【補説2】その後の高須賀稷

高須賀は, 「当時23歳。明治18年に愛媛県師範学校を卒業, 小学校の教員となり, 明治23年3月辞職, 上京している」(三輪田(2005), 115ページ)と本文で引用したように, 慶応義塾別科に入学し, 慶応義塾大学理財科(現経済学部)を卒業するまでの短期間ながら, 三輪田眞佐子繋がりである翠松学舎の教員だったことを確認できた。高須賀稷研究の基本文献である押本直正作成の略年譜によれば, 1984(明治17)年1月14日「父嘉平隠居, 家督相続, 戸主となる」のあと, 1889(明治22)年10月慶応義塾別科入学, 1992(明治25)年1月慶応義塾大学理財科入学まで空白となっていた(シソズ(1979), 78-79ページ)。松山市末広町公民館(1984)や渡部(1985), 渡部の執筆による「オーストラリアへの移住——真珠貝採取漁業への出稼ぎを中心に——」(愛媛県史編さん委員会編(1988))にそれぞれ掲載されている高須賀稷略年譜のオリジナルは押本作成のものである(シソズ(1979), 78-79ページ)。

高須賀はのちにオーストラリア・スワンヒルで米作のため灌漑施設をつくり, オーストラリア米の多くを占めるジャポニカ米の基礎を築いたことで知られ, 「豪州米のパイオニア」や「豪州米の父」とも称されている。高須賀が洪水を防ぐために築いた堤防である高須賀バンク(TAKASUKA BANK)には記念碑が建立され, また, タカスカ米はメルボルン博物館に, 妻いち子など家族の記録はスワンヒルの記念館(The Pioneer Park)に, それぞれ保存・展示されている。スワンヒ

ルには‘Australia’s First Rice Farm’ ‘TAKASUKA RD’ (Road)の標識もある。また, ヤンコー農業試験場には初めてジャポニカ米が試験的に栽培された場所として高須賀の写真を掲げた記念碑がある。テレビ愛媛「高須賀稷物語〜一粒のかけた夢〜」は第4回FNSドキュメンタリー大賞佳作を受賞した(1995年)。高須賀と同時期に帝国議会代議士(高知選出)となった西原清東は奇しくもアメリカ・テキサスで米作を広め, アメリカにおけるジャポニカ米栽培の先駆けとなった。高須賀も西原も日本産の種米を使って苦難の末に異国で米作普及に貢献した(押本(1996)参照)。

「稷の一粒」(オーストラリア産の輸出米の名前。松平みな(2015)の小説のタイトルにもなっている)には眞佐子の思いも詰まっているにちがいない。久保田満里子(2016)は稷と結婚後オーストラリアに渡り二度と帰国することなく骨を埋めた妻いち子の物語である。

また, 済美高等女学校を設立した(1911(明治44)年, 最初期は松山裁縫傳習所(1901(明治34)年)として開設)船田ミサヲ(白川義則の妹), 今治高等女学校(1899(明治32)年, 現今治北高等学校)で女子中等教育に貢献した長尾秀は, 三輪田の教え子にあたる。ちなみに, 船田は愛媛大学の前身のひとつである松山高等学校設立にあたり(1919(大正8)年), 松山市の公会堂を寮とした緑寮の寮母をつとめた。船田を讃える胸像が済美高等学校の玄関前に建立されている。

#### 6. 同志社の「松山バンド」

松山のキリスト教関係者として慶應義塾出身者(黒田進, 菱田中行, 橋本タダ[押川方義の実母], 村井知至, 上代知新ら)と同志社出身者がいる。「愛媛県出身の同志社生徒は, 明治23年の報告では, 京都府・岡山県・兵庫県に次ぐ勢いを示している」(高橋(2003), 122ページ)。

同志社は, 新島襄の創業力, アメリカン・ボードの経済力, 熊本バンドの人材力, によると言われることがある。熊本バンドとは日本プロテスタント史の源流のひとつと称される(総括

的な研究として、同志社大学人文科学研究所編（1965）がある。「横浜バンドや札幌バンドなどと並ぶ日本プロテスタント史の源流の一つで、日本組合基督教会の支柱。熊本洋学校のジェーンズの感化を受けた学生たちが、1876年「奉教趣意書」に署名したことに始まる。なかでも同志社を79年に卒業した小崎弘道、宮川経輝、海老名弾正、横井時雄、金森通倫（みちとも）、山崎為徳（ためのり）、浮田和民、不破唯次郎などの第一期生（15人）は全員が熊本洋学校の出身者であった。その信仰は概して国家主義的で、ミッションからの経済的独立に熱心であった。新神学にもいち早く傾斜した。『七一雑報』『六合（りくごう）雑誌』、『新人』『基督教新聞』などのキリスト教系メディアで活躍をする者が多く出た」（本井康博（2002）、333ページ）。

創設期の同志社はキリスト教関係者に知られていた学校のひとつであり、教会からの奨励金で進学するものや新島襄が伝道集会を開いた地域からのもの、宣教師の推薦によるものなどが集まった。横浜、熊本、札幌の出身者を「三大バンド」と称するが（若林（2010））、松山夜学校・松山教会出身で伊予弁を話す「松山バンド」もそれらに劣らずよく知られていた。「その頃（1917年頃：引用者注）、松山出身の神学生は7名（今井新太郎、二宮源兵、林半、重松榎太郎、二神喜十、魚木忠一、及び平岡徳次郎）で、全学生の一割を占めていた。このように多数の神学生を送る松山（松山夜学校と松山教会）とはどんな処か、ある宣教師は視察見学に来松した程であった。（改行）彼らは、そのグループを松山バンドと称し、クラーク博士を中心とする札幌バンド、ジェーンズ大尉の熊本バンドにならって大いに信仰の研鑽と学究に精励していた。（二宮喜十氏談）」（日本基督教団松山教会（1986）、111ページ）。

竹中（1988）は、初期の同志社英学校の生徒名簿のなかから愛媛県出身者を抽出した資料を提示している（邦語神学生、神学科生、別科、および予備学校含む）。これによると、1984（明治17）

年4月12名、1985（明治18）年4月17名、1989（明治22）年1月43名、1990（明治23）年5月45名を数えることができる。また1879（明治12）年以降の同志社英学校卒業生から愛媛県出身者を掲げており、1984（明治17）年6月卒業生3名、1985（明治18）年6月別課（ママ）神学卒業生2名、1987（明治20）年6月卒業生数3名、1988（明治21）年6月別課（ママ）神学卒業生1名、1989（明治22）年6月別課（ママ）神学卒業生1名となる。

「これらの愛媛県出身者の生徒たちは、明治23年5月調の報告では、総生徒数518名のうち45名を数えている。これは、地元京都府の78名、兵庫51名、つぎに比較的近い岡山の67名には及ばないが、同志社と密接な関係にあった熊本の28名、群馬27名よりはるかに多い生徒たちが愛媛県から同志社で学んでいたことを知るのである」（竹中（1988）、66ページ）。おそらくこれに依拠して、他の文献でも「大正初期に同志社神学生は約70人であった。伊予弁を話す神学生がその一割もいた。彼らは松山夜学校出身者で「松山バンド」と呼ばれていた」としている（松山城南高等学校編（2000）、29ページ）。

松山バンドの育ての親となった西村清雄は伝道集会で宮川経輝に出会っている。西村は宣教師として来松したC. ジャドソン（後述）とともに普通夜学会創立に関わり、初代校長となる。松山バンドには引用に示したように今井新太郎、重松榎太郎、二宮源兵、魚木忠一、二神喜十、入江源次郎、野本教男らがいる。また、西村は松山夜学校から、浜田勝次郎、平田寛、松浦道春、塚本喜多男、金元治、森利道、関岡武太郎（第3代校長）、藤岡智幸、宮内芦隆、高田修、西村義臣（第8代校長）らを同志社へ、大野五十鈴を日本神学校へ、大野賢一、浅倉重雄らを神戸神学校へ、白石愛子を神戸女子神学校へと送り出している（松山城南高等学校編（2000）、29～40ページおよび松山城南高等学校編（2001）、6ページ）。

「1875年に創立された同志社に学んだ、初代

校長西村清雄は、松山夜学校に学ぶ生徒たちに、礼拝・聖書講義そして祈り会などでキリスト教を基盤とした教育をした。／大正初期、同志社神学生は、約70人であった。その一割の神学生が伊予弁で話していた。熊本弁を話す熊本バンドや、北海道からの札幌バンドと同様に松山バンドと呼ばれた。バンドとは「キリスト教の信仰で生涯を生きようと固い約束をした仲間」のことである。／松山夜学校から同志社神学部に進んだ者は、卒業後、キリスト教の伝道を始め、教育や社会福祉事業にその生涯を捧げている」(松山城南高等学校編(2001), 6ページ)。松山城南高等学校編(2001)には松山バンドメンバーの顔写真と松山バンド発会式の集合写真などが収められている。

## 7. 松山女学校, 普通夜学会, ジャドソン

コーネリア・ジャドソン(ジャジソンとも, Cornelia Judson, 1860.10.20-1939.9.17)は、宣教師としてアメリカン・ボードから派遣され1887年来日した。最初新潟女学校で英語教師として、その後は1890年から松山女学校(現、松山東雲学園)の英語教師となった。既述のように、松山女学校は、四国にまだ女学校がなかったことから松山教会初代牧師の二宮邦次郎によって設立されていた(1886年(明治19)年9月16日)。二宮はアメリカン・ボードの宣教師を派遣の依頼をしていたのだった。二宮は松山女学校の初代校長でもあった。

設立期の松山女学校に大きな貢献をしたのが当時小松教会に属していた喜多川久徴(ひさあきら)である。「彼は小松藩家老の家に生まれ、成長して小松県大参事となって知事一柳頼明を助けたが、明治15年信仰に入り長老として教会を支えた。最も激しい迫害を受けた一人であるが、二宮邦次郎が創立した松山女学校(松山東雲学園)の経営援助を求められたので、松山へ転住し家財一切を捧げ、女学校の経営危機を救った」(愛媛県史編さん委員会編(1985), 829ページ)。

ジ)。

「二宮邦次郎が松山教会を創立、松山女学校と普通夜学会は、松山教会を母なる教会として生まれたのである。見えない神の御手は松山の地にキリスト教を基盤とした二つの学校創立という大事業を成し遂げられた」(松山城南高等学校編(2000), 14ページ)。

「松山女学校より五年遅れて、明治24年1月14日、キリスト教主義に立つ普通夜学会が創立した。これはのちの松山夜学校、松山城南中学、同高等学校に発展するが、アメリカン・ボード宣教師コルネリア・ジャドソンが、松山女学校教師として赴任し、ある日街中を歩いて不就学児童の多きを嘆き、教会員西村清雄とともに始めた小学校程度の私塾であった。学制が頒布されて小学校は出来ても、授業料の要る学校であってみれば、就学できない児童は少なくなかったのである。のちに小学校が整って来、生徒の学習意欲も高まって勤労青少年を対象とする高等小学校あるいは中学校に等しい夜学校としてその使命を果たすようになるが、戦後設置された定時制高校に匹敵する働く青少年のための学校が、約60年前よりこれらともすれば忘れがちにされて来た若者たちに、暖い愛の目をもって勉学の機会を与えてきていたのである。

(改行) 明治20年9月、教会は小唐人町一丁目(現在大街道二丁目タイガー劇場)押川方義(東北学院および宮城学院の創始者:引用者注)所有の寄席を借りていたが、同町巽小学校跡を信者の献金で買い取り移転した。これは戦災で焼けるまで教会堂であった。(改行) 教会は二宮牧師を中心に、菱田中行らは伝道に主力を注いで松山監獄内に囚人伝道・青年会大演説会、市内は魚町・花園町、市外は高井村・郡中・久万、さては宇和島まで足を伸ばし講義所を開設、一方、吉田清太郎、増田シズらは教育に力を入れて松山女学校の教師となり、長屋忠明・東正信・杉浦忠直らは、教会と学校との経営の責任を負うた。

(改行) 吉田清太郎(1863~1950)は、文久三

年、松山市玉川町に生まれ、同志社に学ぶ。当時、貧困学生山室軍平（のちの救世軍中將）に会い、その非凡なるを見抜き、学費生活費を与えて激励、自らはそのため死猫を食べて飢えを凌いだという逸話の持主である。松山女学校を数回にわたって無償で助けたこともあり、松山監獄に囚人と起居をともして回心を促がし、また、妓楼全廃の建議案を県議会に提出するなど、社会的にも活動した。東京千駄ヶ谷教会牧師となって一生を終った。（改行）明治34年10月5日、松山教会員大本新次郎は宣教師シドニー・ギュリックの助けを受けて、魚町三丁目に松山同情館を作った。それは日清戦争後の好景気から続々建設された繊維工場女工を受け入れる、寄宿舎を持った夜間教育施設であった。女子勤労者が特に低賃金、長時間労働という悪条件で酷使され、悪い生活環境から発病したり転落したりするものが多数に上ることから、彼女たちを救済するためであった。そのうち工場と幼稚園を併設して、福祉コミュニティとして発展したが、一般紡績工場が機械の改良、工具福祉の向上に意を用いるようになって、その使命終われりとして大正10年閉鎖した。初代牧師二宮邦次郎は、明治33年より全国巡回教師となって松山を離れていたが、教会は同36年1月、組合教会及び本人の意志を尊重して東京へ送ることに決し、涙をのんで松山市駅に一家を見送った」（愛媛県史編さん委員会編（1985）、830～831ページ）。

「〔西村：引用者注〕清雄は小学校に準ずる各種学校とするため永木町に校舎を新築した。ジャジソンはこのために自分の生活費を節約して献金した。「私立松山夜学校」の看板を掲げたのは1895（明治28）年であった。欠席者や退学生を少なくするために校内に授産場をつくった。生徒たちは昼間は綿ネル工場で働き、夜は学校で勉強した。女子生徒のための寄宿舎もつくった。自給自足の生活はキリスト教初代信徒たちの共同生活のようであった。野菜畑、芋畑、桑

畑の仕事をみんなで分担した。清雄は率先して働き、生徒たちも共に働いた。喜んで助け合っている様子は地域の人々に理解を与え、協力や支援を得られた。又寄宿舎に入りたいという者も増えてきて清雄は事務室を片付けて寝なければならなくなった。「いもがゆ」が最高のご馳走だったのはこの時代である」（松山城南高等学校編（2000）、21～22ページ）。

愛媛県史では明治期の民間の慈善救済事業を跡づけ、クリスチャンによる慈善活動の一端をこう叙述している。「明治時代における民間の慈善事業活動は、岡山孤児院創設者石井十次、巢鴨家庭学校創設者留岡幸助、日本救世軍の創設者山室軍平等熱心なクリスチャンの業績に負うところが多い。（改行）愛媛県においても、明治24年1月、米国婦人コルネリオ＝ジャジソン、二宮邦次郎、西村清雄らが協力して松山市三番町に私立松山夜学校の前身である普通夜学会を創設した。これは昼間就学できない労働者に授業料なしで普通教育の機会を与えるもので、通学不便の者には寄宿舎を設けた。夜学校の運営費は、米国婦人伝道会社の寄付金や愛媛県の補助金及び篤志家の寄付金で賄われ、明治二七年には永木町に校舎を新築移転し併工場を併設して生徒の授産と教育をすすめた」（愛媛県史編さん委員会編（1988）、707～708ページ）<sup>6</sup>。

愛媛県史編さん委員会編（1986-2）は、女子教育と就学機会に恵まれない青少年教育にはたした松山女学校と松山夜学校の意義をこう書いている。「明治時代前期において、国民一般の女子教育に対する関心は極めて薄く、女子にとって小学校以上の教育は無用であり、有害であるとさえ考えるものも少なくなかった。この当時、女子の中等教育及び高等女学校に関する規

6 西村清雄の顔写真を掲載しているほか、大本新次郎による松山同情館（のちに私立松山同情館女子夜学校）と宇摩郡上分町（現川之江市）の上分町愛生慈善会の活動について説明している。

定すらもない有り様で、当局もその振興を図る施策も皆無であった。(改行) 明治18年1月に松山キリスト教会が創立された時、牧師として来松した二宮邦次郎は、松山に中学校が存在するにもかかわらず、女子にこれに該当する教育機関がないのに同情し、出淵町の民家を借り、これを仮校舎として、9月に松山女学校を発足させた。同校には本科・予科・手芸科があり、本科は高等小学校第三学年の修了者が入学し、修業年限は三年であった。予科は小学校四年卒業者を対象とし、修業年限は二年であった。商議員には県学務課長・師範学校長・高等小学校長のほかに、長屋忠明・村井信夫らが当たった。(改行) 同23年5月に、二番町に敷地を購入して二階建の洋風校舎を新築した。さらに校則を改正して、本科三年・予科二年とした。

(改行) 松山女学校英語科教師の米人コルネリオ＝ジャジソン(ジャドソンともいう)は、二宮・西村清雄らの協力を得て、同24年1月に松山夜学校を松山二番町に創設した。(改行) 同校は、昼間職業についているため勉学の機会に恵まれない青少年を対象とし、キリスト教の精神に基づいて教育した。同27年5月に正式に夜学校としての認可を受け、永木町に校地を購入した。教科課程は尋常小学校程度を標準としたが、同32年に従来の尋常科のほかに高等科を設置するに至った。同校では授業料を徴収しなかったばかりでなく、通学に不便を感じない生徒のために寄宿舎を設置した(愛媛県史編さん委員会編(1986-2), 770～771ページ)。

こうして就学できない児童のための無料の夜学校である普通夜学校や四国で最初の女学校である松山女学校にみられるキリスト教を基盤とした学校創立が労研饅頭誕生に大きく関係してくることになる。労研饅頭誕生のエピソードとして語られる竹内成一による製造・販売にいたるまでには、19世紀中葉以降のわが国と四国・愛媛でのキリスト教布教の歴史と民間の慈善事業への支援の輪の広がりがあった。【補説3】

### 【補説3】松山のキリスト教の伝統

竹中正夫(1998)は、松山のキリスト者の特徴を、(1) 霊性の涵養(宗教的体験の重要性)、(2) 文化的背景、(3) 福音による人間形成、(4) 女子教育への情熱、(5) 忍従の同労者、にまとめている。

(1) では、村井知至、魚木忠一、吉田清太郎を挙げ、「祈りによる聖霊の働きを大切にし、その伝統は、榎本保郎牧師の「ちいろば」の体験へとうけつがれている」とした(78～79ページ)。榎本は若い神教徒時代に農村伝道の拠点を企図した世光教会(京都・伏見桃山)を設立し、日本基督教団今治教会(1879(明治12)年9月に設立された四国で最初のプロテスタント教会)の牧師をつとめ(1963年～1975年)、のち近江八幡市を拠点にアシュラム運動を推進した。著書である榎本保郎著『ちいろば』(聖燈社、1968年12月)、『ちいろば余滴』(聖燈社、1972年9月)で知られ、三浦綾子著『ちいろば先生物語』(上)(下)(集英社文庫、1994年6月)で濃密に描かれている。勝間としを漫画・物語構成かつまかずえ『ちいろば——榎本保郎物語熱血牧師の教会奮闘記——』(らみいコミックス、2006年9月)もある。

(2) では、同じく村井知至、西村清雄、魚木忠一、今井新太郎から松山のもつ「文化的感受性」を分析している。「松山は古くから宗教心のさかんなところであり、かつ正岡子規、内藤鳴雪、高浜虚子などの俳人を輩出した文化的土壌であり、そこで形成され、表現されたキリスト教信仰には文化的香りがあった。キリスト教を理性的教説としてうけられるよりも、あるいは倫理的徳目とするのではなく、むしろ、自己の心情に福音の響きを反響させて、その信仰体験を詩歌として表明し、日本の文化的感受性をもって福音に応答するようにつとめた」(79ページ)。とくに、村井を「広い教養と多趣味をもった風流人」(村井は自ら「蛙人」と称した)、西村を「自らの信仰を詩歌、俳句などを通して随時表現した代表的な例」、今井を「俳句をたのしみ、日常の喜びや悲しみを句を通して表現する風情をもつ人」、魚木を「おそらく日本のプロテスタント神学者のなかで、日本の精神的伝統を生かして、神学的考察を志向した最初の神学者」と特徴づけている(79～84ページ)。もっとも、竹中は村井の宗教的体験重視と超越性の感得から課題を抽出している。「自己のうちに神の存在をみようとしたとき、日本の文化との接触が主観的なものとなり、国家主義的な潮流が強くなってきたときに、それに対する批判的な視点を与える超越

的基盤を稀薄にしていた」(81ページ)と指摘している。西村は、宇和島で伝道していたC. ジャドソン(後述)を訪ねて約2週間経ってその帰途で難所だった法華津峠と鳥坂峠での経験をもとにした賛美歌「山路越えて」(第404番)の作詞で知られている。この賛美歌はもっとも有名な創作賛美歌と言われており、法華津峠と松山夜学校の後身である松山学院高等学校に歌碑がある。西村の祖父は幕末の松山を代表する儒者にして歌人の西村清臣。当時の道後湯之町町長をつとめ道後温泉本館を新築した伊佐庭如矢(いさにわ・ゆきや)は母方の祖父にあたる。西洋音楽の普及はキリスト教の布教と軌を一にしており、「本県における音楽の水準を上げるために、キリスト教関係者の礼拝を通しての努力は目をみはるものがある。事実、キリスト教精神によって創立された松山女学校は「はいから」な学校として、当時の本県の音楽会をリードし、師範学校よりもレベルの高さを誇っていた」(愛媛県史編さん委員会編(1986-1), 464ページ)ほどである。

(3)では、松山女学校、佐賀県鹿島鎔造館での教師、千駄木教会牧師を経験した吉田清太郎と本郷教会牧師、わが国最初の社会主義研究会の会長、英語教師を経験した村井を例に、「教育者としての性格が共通している」とまとめている(84～86ページ)。

(4)では、松山女学校設立以来、教師として教育にあたり(二宮邦次郎、吉田清太郎、増田シズ、安永コト、尾藤スズなど)、教会の役員や女学校の理事として尽力したことを(東正信、長屋忠明、杉浦忠直、村井信大、喜多川久徴、杉浦ミツ、杉浦シゲ、福見オリエ、朝山モノなど)、指摘している。また、松浦政泰を「女子教育の領域で顕著な働きをした人」・「同志社の女子教育の恩人」と称揚している。「女子教育に貢献した人」として西村清雄と二宮源兵を挙げるのを忘れていない(86～87ページ)。

(5)では、「日本組合基督教会の流れにおいて主役的役割」・「主役的存在」だった熊本バンドに対し、「長くジャドソン宣教師を助けた西村清雄」, 「27才(ママ)で同志社女学校の教頭に就任し11年間、同志社女学校の再建、維持のために、地道な働きをつづけた松浦政泰」, 「神学部長大下角一をたすけ、細いところにまで学生の指導をなし、漸く部長に就任して間もなく逝去した魚木忠一」のように、「忍耐づよい地味な協同者としての姿勢」を炙り出している(88～89ページ)。

## 8. 救済事業・社会事業

「米騒動を機に、細民問題の解決を図ろうとする社会問題研究会・愛媛救済事業同盟会・松山臨時救済会など多くの団体が結成された。これらの団体の中には、米価のほかに住宅、失業、部落改善、民力涵養などの問題を採り上げるものもあった。愛媛救済事業同盟会には、明治期以来本県の細民救済に尽くしてきた松山同情館の大本新次郎、愛媛慈恵会の本城徹心、私立松山夜学校の西村清雄らが参画した。大正一年三月、同会の事業を継承する形で、愛媛県社会事業協会が発足しその事務所を県社会課内に置いた。同協会の設立発起人には、本城徹心・西村清雄のほか日本赤十字社愛媛支部・愛媛保護場・県立自彊学園・私立愛媛盲啞学校・愛国婦人会愛媛支部・県社会課の各代表者が名を連ねたが、大本新次郎は発起人に加わらなかった。県知事宮崎通之助を総裁とする同協会の目的は、県内各社会事業団体の連絡調整を図りながら、社会事業と思想善導など社会教化事業の発展を期すことにあった」(愛媛県史編さん委員会編(1988-1), 326ページ)。

愛媛県の社会事業行政はもともと明治期の内務部第一課や監獄署庶務課による備荒儲蓄、賑恤救済、慈恵に関する行政だったものから、大正期の知事官房秘書係、内務部庶務課・学務課による遺族扶助料、賑恤救済、感化事業を取り扱うようになった。社会事業が独立した分野ではなく関係する課や係の一分掌だった。米騒動を機によりやく内務部庶務課に民力涵養係が新設され、「健全ナル国家観念ヲ養成スル」, 「公共心ヲ涵養シ犠牲ノ精神ヲ旺盛ナラシム」, 「勤儉力行ノ美風ヲ作興シ生産ノ資金ヲ増殖シテ生活ノ安定ヲ期セシムルコト」など民風振起や民生安定策を職掌とした。その後内務部に社会課が設置され、社会事業と社会教育行政を内容とする社会行政が確立した。公設市場事業の奨励と補助および職業紹介所事業の奨励と補助など

とならんで具体的な施策に位置づけられたのが愛媛県社会事業協会の事業振興と補助および民間社会事業団体の助成（愛媛盲啞学校, 愛媛慈恵会, 松山夜学校, 愛媛保護会, 宇和島済美婦人会など）である。

このうち愛媛県社会事業協会の発足にあたって大きな影響を与えたのが救貧事業に関する当時の内務省官僚, 大学教授, 民間人が中心となり, 社会事業の全国的な連絡機関である渋沢栄一を会長とする中央慈善協会の発足である（1908（明治41）年, 1912（大正元）年より中央社会事業協会と改称）。愛媛県内では松山同情館, 愛媛慈恵会, 松山夜学校, 愛媛盲啞学校, 県立自彊学園の各代表者による愛媛救済事業同盟会をもとに, 松山夜学校の西村清雄, 愛媛慈恵会の本城徹心, 日本赤十字社愛媛支部の渡部綱道, 愛媛保護会加藤利正, 自彊学園奥山春蔵, 愛媛盲啞学校久保儀平, 愛国婦人会愛媛支部三宅芳松らが発起人となって愛媛県社会事業協会が設立された（1922（大正11）年3月9日）。

愛媛県社会事業協会の特徴は, 「官民一致して, 人心の善導・社会の不祥事の未然防止・社会の疾病の救済に当たるべき」だとしていることである（『愛媛県社会事業協会規則』, 「愛媛社会事業」1924（大正一三）年版第一号）。当初案は, 愛媛県内務部社会課で作成され, 協会の総裁はじめ要職には愛媛県知事, 内務部長, 社会課長が当たるというものであった。最終的には会長に内務部長がつき, 会は設立された（1923（大正12）年11月24日）。その後, 西宇和郡社会事業協会（神山村矢野町（現八幡浜市））および新居郡社会事業協会（新居郡西条町明屋敷）が創設され, 医療・職業・就学などに関する人事相談, 社会奉仕日の設定と造花配布による募金活動, 印刷物配布による社会事業啓発活動などを行った。さらに, 県内各地での国民生活改善展覧会や幼児保育職員養成講習会の開催や会誌『愛媛社会事業』（1930（昭和5）年4月からは月刊）となった（以上, 愛媛県史編さん委員会編（1988-1）, 900～908ページ）。

松山夜学校や西村清雄の名がみえるように, 愛媛救済事業同盟会から愛媛県社会事業協会への展開には民間からの活動が「官民一致」のもとで徐々に愛媛県の事業に吸収されてしまう事情があった。愛媛県が総力をあげて社会事業を行政の懸案事項に昇華させて取り組む事情をみてとれよう。

## 9. 初等中等教育制度：普通夜学会・松山夜学校の設立

すでに引用した西村拓の証言にあるように, 夜学校には「労研饅頭, それに綿ネル工場」のための授産場があり, その一角に「労研饅頭製造工場」もあった。労研饅頭製造・販売当時のものと思われる「一包四ケ入金五銭 【一食分】主食代用カルシウム入 労研饅頭」と労研饅頭製造・販売から3周年経ったことを明示した「労研饅頭創業三週（ママ）年記念感謝割引」, 「籐工部新設案内」, 「聖書賛美歌写真アルバム販売」を確認でき, 「労作教育」（西村清雄）の一環で籐や聖書賛美歌写真アルバムの販売も手掛けていたことがわかる。それだけでなく, 「夜学校事業の労研饅頭製造のため, 六時屋のおじさん（村瀬宝一のこと：引用者注）, 又関岡（武太郎：引用者注）先生も夜学校の生徒として校内に住まわれるようになりました」（二神純子「六時屋おじさんの思い出」, 村瀬五十子（1976）, 67ページ）と労研饅頭製造の臨場感が伝わってくる。

授産場の綿ネル工場は実業家の柳瀬春次郎の協力を得て新設されたものであり（1894（明治27年11月）, そこで働く生徒のための女子寄宿舎も作られた。綿ネル工場の一時閉鎖（女子寄宿舎の閉舎）のあと, 機業家の田内栄三郎の援助で緋織機を導入し工場再興（女子寄宿舎再開）をはたした歴史がある（1897（明治30）年1月）。その後女子寄宿舎は男子生徒の増加によって閉舎し男子寄宿舎になる（1908（明治41）年4月）。

### 【表1】

松山城南高等学校（2001）には, 「勤労と学

表1 普通夜学会・松山夜学校・松山城南中学・松山城南高校・松山学院略年譜

1891 (明治24) 年1月14日	普通夜学会 (松山市三番町)
同年11月15日	校舎を松山市南八坂町 (現千舟町1丁目) に移転し、キリスト教少年会と改称
1894 (明治27) 年11月	校舎を松山市永木町17番地に新築移転し、私立松山夜学校と改称
1938 (昭和13) 年4月	松山夜間中学
同年7月3日	財団法人松山学院発足
1943 (昭和18) 年4月	松山城南中学校と改称
1944 (昭和19) 年4月	松山城南中学と改称
1947 (昭和22) 年4月	新制中学校を併設
1948 (昭和23) 年3月	学校法人松山学院と組織変更
同年4月1日	夜間中学を定時制高等学校に昇格、松山城南高等学校と改称
1951 (昭和26) 年4月	全日制普通科高等学校を併設
1960 (昭和35) 年4月	全日制高等学校設置
1961 (昭和36) 年3月	定時制最後の卒業式
1969 (昭和44) 年4月	男女共学制実施
1982 (昭和57) 年3月	松山市北久米町815番地に新築移転
2021 (令和3) 年4月	松山学院高等学校と改称

びのよろこび」のタイトルで授産場と伊予餅を織る女子生徒の写真および労研饅頭製造風景・工場玄関前での集合写真が掲載されている (松山城南高等学校編 (2001), 5ページ)。さらに松山夜学校奨学会事業部名の労研饅頭と事業内容の

公示文がある<sup>7</sup>。【資料1】

【補説4】私立松山夜学校・松山夜間中学校

松山城南高校 (現在は北久米町) [現松山学院高校: 引用者注] の前身である「松山夜学校」を創立したの

【資料1】



7 松山城南高校編 (2011) にはアングルが異なる労研饅頭工場および同一の労研饅頭製造風景の写真が収録されている (19ページ)。

は、宣教師コーネリア・ジャジソン。彼女は、明治23年(1890)、四国最初の女学校である「松山女学校」(現東雲学園:引用者注)に教師として、新潟の女学校から転勤して来た。義務教育がまだ施行されていなかったその頃は、家が貧しいゆえ就学できない子供たちが多かった。「これらの子供たちを教育する施設をつくらねば……」と、彼女は決心する。(改行)当時、ジャジソンは30歳。日本語も十分ではなかった。しかし、彼女の熱意は三人の青年キリスト教徒の心を動かす。その一人が西村清雄だった。同24年1月14日、三番町にあった彼女の家が教室となり、夜学校は開校する。生徒25人だった。(改行)校舎は、その年の11月に南八坂町へ変わる。周辺に伊予緋の工場があり、ここに働く少年少女が多数詰め掛け、盛況だった。(改行)ジャジソンは、西村を校長にする。そして、それまで無認可のままだった学校を、小学校に類する各種学校として認可してもらうために、永木町に新校舎を建設した。同28年11月校舎完成。名称も「私立松山夜学校」とした。その費用は、ジャジソンが生活費を切り詰めて、この日のために貯蓄していたものだった。(改行)松山夜学校に転機が訪れる。明治33年から小学校の授業料が全廃されることになった。これに伴い、小学校未就学児童の教育に当たっていた同校の存在理由がなくなった。そこで、同校では教育程度を高め、中学程度の教育を施すことに踏み切る。同39年、中学と同程度の本科、高等小学程度の予科を設立、同校は再スタートを切った。入学者は多かったが、中途退学者もこれまた多かった。(改行)創立以来47年間、無資格のまま続いた夜学校は、昭和13年(1938)に晴れて文部省(現在の文部科学省)指定の「松山夜間中学校」になる。これにより、上級学校の入学試験を受ける資格が得られるようになり、それまで多かった中退者の数も少なくなった。同18年、校名は「松山城南中学校」に変わる。同23年からは新製の定時制高校となり、26年に全日制を併設した。長年親しまれてきた“夜間”の使命を終えることになる。(改行)創立者ミス・ジャジソンは、昭和7年に帰米し、同14年に死去する。学校の基礎を築いた西村清雄は、昭和37年に松山市の名誉市民になり、2年後の39年に死去した。(改行)賛美歌404番の「山路越えてひとりゆけど主の手にすがれる身はやすけし」は、西村の作詞としてあまりにも有名だが、これはジャジソンが宇和島で伝道している時期、峠を越えて西村が伝道の応援に行った時のものである。賛美歌の一節は、法華津峠(東宇和郡宇和町と北宇和郡吉田町の郡境)に立つ碑に刻まれている。(改行)幾

多の苦難を乗り越え、理想に燃えた二人の建学精神は、長く継え続けられることだろう。

(池田洋三(1975),89ページ,池田洋三(2002),126ページ)



松山夜間中学校(1935(昭和10)年代後半,池田洋三(2002)124ページ)



コーネリア・ジャジソン(池田洋三(2002),126ページ)

## 10. 竹内成一の貢献

労研饅頭の誕生と現在につづく90年の歴史において竹内成一を抜きに語ることはできない。竹内は香川県坂出市加茂町氏部で出生している(1892(明治25)年6月26日)。大阪陸軍幼年学校、陸軍中央幼年学校、陸軍士官学校、陸軍

砲工学校、陸軍騎兵学校を経て陸軍大学に入学後病気のため予備役に編入された。熱心なクリスチャンだった母ウタの勧めにより本郷教会<sup>8</sup>の海老名弾正の礼拝で出席洗礼を受けた(1916(大正5)年11月19日)。海老名は熊本バンドのひとりであり、牧師を経て同志社総長となった人物である。

その後経緯は不明だが、松山夜学校数学の嘱託教員になり(1923(大正12)年9月1日)、広島高等師範で数ヶ月の講習を受け、中等教員として数学科の免許状を得た(1926(大正15)年1月21日)。「年譜」には「昼、松山女学院(現東雲学園)、夜、松山夜学校(現松山学院)で教鞭をとる」(たけうち(1991)、45ページ)との記述がある。「松山夜学校にて奨学会結成(改行)労研饅頭の製造及び販売を始めた」のは、竹内39歳の1931(昭和6)年10月6日のことである(同上)。だが、「奨学会は経済的に行き詰まり、又夜学生には不適當であるということになり、遂に解散→個人の事業へと」となったのは1936(昭和11)年頃である。こうして「労研饅頭の製造は、奨学会から個人竹内成一の事業として出発」することになった。

竹内の召集や戦時中の休業後、戦災を免れ無事だった酵母を使って労研饅頭と甘納豆の製造・販売を戦後直後から再開した。大街道支店の開設(1949(昭和24)年頃)、登録商標「労研饅頭」取得(1952(昭和27)年11月26日)、竹内商店から株式会社たけうちへの組織替え(1954(昭和29)年2月1日)、本店舗新築(1980(昭和55)年10月25日)、大街道支店改装(1982(昭和52)年10月)を経て、創業60周年となった1991年には記念誌たけうち(1991)を発刊した。

竹内は労研饅頭製造販売にいたるまでの記録を残している。【資料2】

【資料2】

労研饅頭製造を始めるにあたっての経過概要

1931年(昭和6年9月以降)

竹内成一

(1) 先年、田崎牧師来松の折、労研饅頭を大原労働科学研究所にて売り出し、成績良好なる旨、話あり。

(2) 竹内豫ねて、夜学校生徒に授産事業必要なることを痛感しあり。

(3) 9月上旬、大岡山教会の夏期伝道に従事せし野本数男君来り、岡山の労研饅頭製造の様子を聞き、急に思いつき、同氏より見本を受けとり西村校長・二神教頭に相談の結果一応視察することに決定。

(4) 40年記念日迄に製品を得て宣伝するを可と認め、急速に進行する必要とするに至る。

(5) 9月11日竹内岡山に至り、12日林源十郎商店にて視察

○創業費 55円

内訳	消えるもの(人件費・広告費)	15円
	第一回材料費	15円
	残る道具	25円

○奨学会設立の件

労研事業はこの会の仕事とす。

○9月25日暴風を犯し、竹内・村瀬兩人今治尾道経由にて夜半倉敷着、青年会館宿泊。

26日倉敷労働科学研究所主任森茂夫氏と牧師館にて会合。

許可の内諾を受ける。許可証は来月10日頃、製品を見て送附して来る。

全国同業者別紙の通り写す。

研究所の指定したる名は労研饅頭である。

労研などと勝手につけるはけしからぬ……

(成一の労研饅頭のおぼえ書きより)

(たけうち(1991)、20ページ)

竹内成一の三男で「たけうち」の三代目の眞と妻・郁子は詳しく記録を残している。【資料3】

【資料3】竹内眞・郁子夫妻の証言

(2) 守り続けた昔ながらの味①

ア 向学心を支えた労研饅頭

\*\*\*さん(松山市勝山町 昭和5年生まれ 67歳)<sup>9</sup>

<sup>8</sup> たけうち(1991)の「年譜」には「大郷教会」とある。

＊＊さん（松山市勝山町 昭和11年生まれ 61歳）  
「ロウケンマントウ」、いかにも武骨な名前である。昭和初期、夜学生に学資をと松山でもつくりはじめられた饅頭で、今も手づくりの温かさと素朴な味を伝える。平成3年には＊＊夫妻の手で『労研饅頭と共に60年』（たけうち（1991）のこと：引用者注）の記念誌を発行した。饅頭づくりの経緯や、その後の取り組み、製造の苦心などを夫妻に語ってもらった。

（ア）夜学生に学資を

「わたし（＊＊さん）の父は、労研饅頭が松山で誕生した当初から深くかかわっていました。父は病気のため軍人を退役した後、両親が熱心なクリスチャンだったので、その関係で松山夜学校（現在の松山城南高等学校〔当時。現在松山学院高等学校：引用者注〕）に就職して数学を教えていたようです。

父が労研饅頭の製造販売を始めた昭和6年（1931年）は、世界恐怖の波をかぶり、町に失業者があふれる不景気な時代でした。

当時、倉敷労働科学研究所長暉峻義等（てるおかきとう）（＊＊26）（1889～1966年）博士は、日本の食糧問題に深い関心を持っており、中国東北地方（旧満州）の人たちが常食としていた饅頭をもとに、日本人の主食代用となる食べ物をつくろうと考えました。そして、饅頭製造に慣れた中国人を呼んで研究を重ね、苦心の末、日本人に親しみのもてる味や形の労研饅頭をつくることができました。最初は、家庭で製造ができるようにと製法を公表しましたが、家庭での少量の製造は不経済で、また困難なことが分かり、希望者にその製造法を講習した上、製造販売権を与えることにしたのが、昭和4年（1929年）のようです。

父は、向学心に燃えながら就職口がない夜学生に、学資を与える事業はないかと捜していた時、伝道のため松山にきていた牧師さんから、倉敷労働科学研究所で労研饅頭を売り出し好成绩をあげている話を聞きました。校長・教頭に相談した結果、一応視察することに決定して倉敷市（岡山県）に行き、新しい食べ物である饅頭についての話を聞き、製造の方法を見学しました。

父は、夜学校奨学会の一事業として労研饅頭の製造販売を始めてはと提案して、学校の関係者の承諾を得ました。父が総責任者になり、菓子製造の経験のある、

後にタルト製造を始めた＊＊さんが製造主任になりました。昭和6年（1931年）に＊＊さんは倉敷に行き、そこで製造技術を学びました。かれは熱心に努力したので、短期間に技術を習得して帰りました。

やがて、夜学生15、6人が、学校の寮を工場にして製造を始めました。父は全くの素人でしたので、最初の2、3年は、＊＊さんは製造だけでなく販売面も一任されて、大変苦労されたようです。奨学会事業部の事務を担当していて、後に＊＊さんと結婚した＊＊さんは、そのころの様子を、『酵母の発酵具合を知ることが非常に難しく、それが製品の出来不出来に関係するらしく、そのために徹夜で懐中電灯の光で研究に頑張っていました。また当初は、労研饅頭の知名度は低く、売れ行きが思わしくないので、車を引いて轎（のほり）を立て、夜学校の校歌を大声で歌いながら宣伝をして、売っていたようです。』と、当時の＊＊さんの苦心のほどを話されています。やがて、4個が5銭と、安価で腹もちが良いことから真価を認められ、松山市内の旧制中学校の売店や松山歩兵第22連隊（松山市堀之内を原隊とする郷土連隊）に卸すようになったようです。

『お金のないときに、いつも世話になっていた。』と、当時の学生さんから今でも手紙をもらいます。また『東京などに行くとき、労研饅頭を土産に持っていくと一番なつかしい味だといって喜んでくれる。』とも聞きます。』

（イ）酵母を受け継いで

「昭和10年（1935年）、奨学会の行き詰まりから、労研饅頭の製造販売を父が引き継ぎ、勝山町の現在地に家屋を建て、個人経営で再出発しました。夜学校を卒業した学生たちがそのまま従業員になりました。

昭和11年ころ、倉敷労働科学研究所指定の製法により、同所より分譲された酵母を使用しその監督を受けて製造している店は、1地方に1軒で全国に37店ありました。当時、労研饅頭は評判になり、ある地方では偽物まで販売されたようです。労研饅頭の名称は、最初に始めた暉峻さんが、労働科学研究所の名にちなんでつけたようです。現在（平成9年）、労研饅頭の名称を正式に使って、酵母を受け継ぎ製造している店は、全国でうち1軒です。

第二次世界大戦中、小麦粉は統制品となり、昭和18年（1943年）には製造休止に追い込まれましたが、父は戦時中も酵母をずっと保存し続けていました。幸い、昭和20年の松山市の空襲にも戦災を免れ、労研饅頭の酵母は無事だったので、この年、製造販売を再開する

9 2013年1月27日、82歳で逝去された。

ことができました。酵母は、毎日、栄養源の小麦粉を水でこねて次ぎ足してやれば、生き続けているわけです。今も、加工した生地を少し残して、次の仕込みのときに使うわけです。

戦後は委託加工といって、お客さんが持ってきた原料で、加工賃をもらって製品をつくっていました。この委託加工をしていた戦後すぐの食料難の時代は、自由販売のできない時代で苦労もありましたが、結構忙しい日々でした。

父と一緒にやっていた長兄が、戦病死していたので、父の意志を継いで、昭和29年（1954年）に、わたしが2代目を継ぎました。昭和37年ころから、他においしいものが出だし、洋菓子ブームで労研饅頭の売れ行きも悪くなり、一時衰退した時もありました。洋菓子全盛時代、わたしの家も洋菓子職人を入れて、クリスマスケーキや洋菓子もつくっていました。昭和55年（1980年）ころから、また自然食が見直され盛り返してきました。大きな起伏がありましたが、それでもお客さんは、根強くついてきてくれました。昭和57年、三越松山店の改装や大街道アーケードが完成した時期は、よく売っていました。昭和59年にテレビで紹介され、全国あちこちから労研饅頭を送って欲しいと電話や手紙で注文があり、宅急便で送り始めました。』

#### （ウ）酵母を生かす技

「労研饅頭づくりの手順ですが、主原料の小麦粉は、こしのある中力粉を使います。前日の夜に、小麦粉を水で練り、酵母を入れて、20℃で最低約7時間寝かせて発酵させ、生地をつくります。生地の固さは、うどんの生地くらい固さだと思ってください。発酵した生地に翌朝、上白の砂糖を少量加えて、ミキサーで砂糖合わせをします。それに、豆とかあんを包み、成形してせいろで蒸すのが10分間です（写真1-1-20参照）。蒸しますと、成形したときの約2倍に膨らみます（写真1-1-21参照）。

労研饅頭づくりの苦心するところは、酵母を使っての生地づくりです。酵母の発酵作用に任せる自然の物ですから、発酵の時間が必要で、普通のお菓子のようにその場で練ってすぐ成形して焼くという具合にはいかんわけです。毎日の製造の時間に、酵母の発酵具合の一番よいときを合わせるのに苦労してきました。

生きている酵母は、温度に敏感です。冬は湯で仕込み、保温用の箱の中にストーブを入れて保温しないと発酵しません。夏は、30℃にもなると発酵し過ぎるので、冷蔵庫に入れて、夜間に出したり入れたりして調

節するのです。発酵も時間の進行に並行して進むのではなく、後の方で急に発酵が進むのです。恒温（こうおん）の設備の部屋がないから、毎日の温度や気温の変化に合わせて、勘で管理をします。発酵がまだ若いとき（十分でない）には、蒸しても生地がよく膨らみません。しっとりとした木目（きめ）が締まっているのが労研饅頭の特徴ですが、発酵し過ぎると、蒸したとき膨らみ過ぎてこしがなくなり、すかすかになって食べたときのしっかりした歯触りが損なわれます。味も酸味が出て酸っぱくなります。酵母のつくり出す自然の味を引き出すことで、労研饅頭のこしこし（しこしこ）する歯応えと素朴な味覚が生まれるのだと思います。

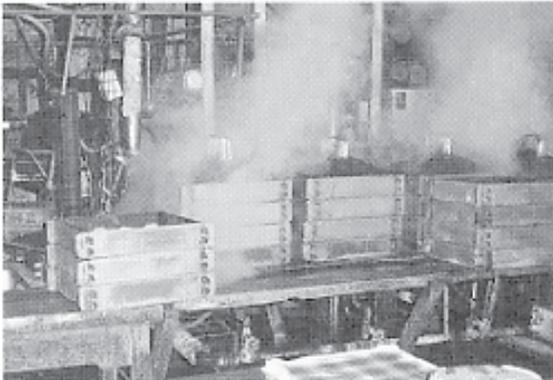
今は、製造する饅頭も14種類になります。塩味の黒大豆を入れたものが労研饅頭の原形で、これを食べた人は、昔の味だと懐かしがってくれます。生地にヨモギを混ぜてみたり、中にあんを入れたりしています。あんもいろいろ種類があり、生地に色を付けているのは、中のかんを区別するためです。一番よく売れるのは、甘い煮豆のようなうずら豆（大正金時）を入れたものです。ヨモギも自家製のものが味も色もいいので、季節には郊外に摘みに行き、ゆでて冷凍しておきます。伝統の味を残しながら、他方、時代の要求に応じた、お客さんの好みにあったものをつくっているのです。』

「（\* \*さん）主人は『製品は、ちょっとしたことで味が違う。気が抜けない。』と言って、いまでも夜中に何回も酵母の発酵具合をみているんですよ。

わたしは、なにも知らないで嫁いできましたが、毎日毎日つくっては売る製造の忙しさを肌で体験しました。支店に製品が間に合わなくなると、自転車に乗って運んだりもしました。従業員が休むと、工場にも出ました。どちらかといえば、会計の問題とか人の問題で苦労しました。主人とは二人三脚、車の両輪ですから、どちらが倒れても傾きますので、健康でやってこれたことが幸いでした。先代から、派手な宣伝はしませんが、口コミでやってくるお客さんも多いし、労研饅頭には、飽きない、なにかしらまた食べてみたいような味があるらしく『素朴な懐かしいふるさとの味だ。』と言って、何十年も買ってくたさる戦前からのお客さんもいるんですよ。お陰様で、3代目の息子も店を継ぎ、若い学生さんやOLの方にもどんどん食べてもらって、みなさんのふるさとの味になってもらえたらと頑張ってくれています。』

戦前各地に広まった労研饅頭も、今は松山市だけに

写真1-1-20 せいろで蒸して



平成9年9月撮影

写真1-1-21 ふっくらと膨らんで



平成9年9月撮影

(愛媛県生涯学習センター編 (1998), 30~33ページ)

名を残す味となった。

- \* 26労働科学, 産業医学者, 医学博士。東京帝国大学医学部卒業。大正10年(1921年)大原社会問題研究所の医学部門として倉敷労働科学研究所を設立し, 所長となる。労働と栄養の関係の観点から, 労働者, 農民, 開拓民の生活を調査した。同研究所は昭和12年(1937年)に財団法人日本労働科学研究所に改組されたのち, 昭和16年に産業報国会の組織となった。

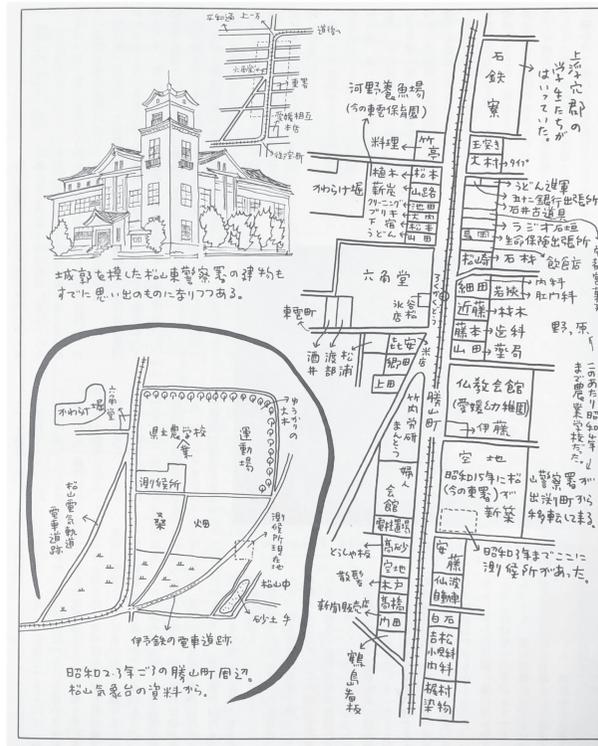
戦後は, 再び財団法人労働科学研究所となり, 昭和46年(1971年)から川崎市宮前に移った。

「昭和10年(1935年), 奨学会の行き詰まりから, 労研饅頭の製造販売を父が引き継ぎ, 勝山町の現在地に家屋を建て, 個人経営で再出発しました。夜学校を卒業した学生たちがそのまま従業員になりました」と竹内の証言のように, 六角堂や竹内労研まんとうの場所を確認できる(1939(昭和14)年前後の地図; 池田洋三(1975), 34ページ, 池田洋三(2002), 45ページ)。勝山町通はもともと農道だったが, 大正末に拡張工事と伊豫鐵道電氣(伊予鐵道の前身)の複線化によって幅約20メートルとかつてない広い道路が誕生した。【資料4】

## 11. 村瀬宝一の貢献

村瀬宝一の妻・五十子(松山夜学校出身。西村清雄夫妻の仲人で村瀬と結婚)は, 「昭和6年(1931年)10月私立松山夜学校(現松山学院)創立40年を記念して, 学ぶにも不況のため職なく学資のない若者達のため奨学会事業部」を発足させ, 竹内成一を部長として「主食代用の労研饅頭と名付けられた怪しげな食物の製造販売をすることになり」, その製法を学ぶために村瀬宝一に「白羽の矢」が立ったこと, 五十子(旧姓石垣)を奨学会事業部の事務担当にして生徒9名の満禱団が産声をあげたことを述懐している(村瀬五十子(1991), 21ページ)。村瀬はこの松山夜学校奨学会事業部設立とともに満禱団に入り労研饅頭製造主任となった(1931(昭和6)年9月)。タルトで知られる六時屋の創業者でもある(六時屋のホームページは1933(昭和8)年4月11日創業と記している)。村瀬は当時松山市大街道にあった松山教会の毎日曜夕拝に出席していたことがあった。のちに, 1933(昭和8)年3月末に満禱団を辞し六時屋を創業した。「中歩行町の借家にて一ケ一銭卸売七厘の小型カステラの卸売をはじめ正直まっすぐをモットーに六時屋と名付けた」(村瀬五十子(1991), 21~22ページ)。村瀬は今治の出身であり, 松山教会にも出入りしていた前後に今治教会第4代菅原菊三牧師

【資料4】竹内労研まんとう創業当時の地図



(1927 (昭和2)年～1935 (昭和10)年)によって受洗している(1929年9月22日の記録を確認できる)(同上, 22ページおよび関岡武太郎「故村瀬宝一兄略歴」, 村瀬五十子(1976), 11ページ)。

「昭和6年9月松山夜学校奨学会事業部設立とともにその製造主任として迎えられ労研饅頭製造に全身全霊を注ぎました」(関岡武太郎「故村瀬宝一兄略歴」, 村瀬五十子(1976), 9ページ)。村瀬の労研饅頭製造への関わりについて詳しい叙述もある。「竹内成一氏の発案で, その記念事業として奨学会が組織され, その事業として労研饅頭(まんとう)を製造することとなり, その製造技術を取得する人材を要すること」なり, 「松山教会員であった村瀬宝一兄が当時今治に帰っていたが, 私は(二神喜十:引用者注)彼こそ適当な人物だと思って電報で呼び寄せ, 事の次第を話し其協力を求めた所彼も大いに共鳴して協力することを承諾してくれたので, 饅頭を製造している倉敷労働科学研究所にその技術を取得するために派遣し, 之を取得して帰松

し主任者として熱心に心身を労してよく努力してくれた」(二神喜十「村瀬宝一兄と私」, 村瀬五十子(1976), 33ページ)。

その後村瀬は「昭和7年4月11日松山や学校長西村清雄夫妻の媒酌, 平岡徳次郎牧師の司式により石垣五十子姉と結婚し, 夫妻力を合わせて勤労学生の授産事業に協力し」たが, 「孝心のあつ兄は永い間淋しくやもめ暮らしをしているお父さんの上に思いをはせ独立自営して孝養をつくそうと決心し, 竹内(成一:引用者注)部長に半年後には退職したい旨申出でその間くわしく製菓技術を後任者に伝授し昭和8年3月末日円満に退職」した(関岡武太郎「故村瀬宝一兄略歴」, 村瀬五十子(1976), 9ページ)。

これによって村瀬が労研饅頭製造技術を会得しながら, 「独立自営」のため短期間で松山夜学校奨学会事業部から離れ六時屋創業にいたる事情がよくわかる。村瀬は家業である六時屋の経営のかたわら, 食品協会や菓子組合の要職を歴任し, 松山城南高等学校(当時)の評議員理

事や松山東雲学園の評議員, 愛媛県保護司, 日本国際ギデオン教会松山支部初代会長などをつとめた。また, 私財を提供して財団法人村瀬奉仕財団<sup>10</sup>を設立し(1970(昭和45)年), 教会, 教育機関, 社会福祉施設などへの寄付をおこなってきた。村瀬の告別式は, 株式会社六時屋社葬として村瀬緑の松山城南高等学校講堂で執り行われた(1976年5月24日)。

別の記録でも村瀬五十子は「学校で労研饅頭をつくりました。創立40周年記念のとき, 校庭に天幕を張ってな, 労研饅頭をつくっていただきました」と語っている(松山城南高等学校編(2000), 96ページ)。また, 西村清雄の甥・西村拓(松山東雲中・高校第7代校長, 松山城南高校第7代校長)は, 「(ジャジソン先生は) 労研饅頭, それに綿ネル工場でも働いていました。夜学生もいっしょに」(同上, 97ページ)。

村瀬五十子は詳細な記録を残している。【資料5】

#### 【資料5】村瀬五十子(六時屋)の記録

(2) 家業とともにタルトにかけた情熱を受け継ぐー  
全国へ松山銘菓(めいか)タルトを知ってもらうことに生涯をかけ, 「わしは, タルトと心中する。」と言った(株)六時屋の創業者, 村瀬宝一のもとに昭和22年(1947年)に養女に入り, 以来, 今日までタルトにかけた父の情熱を受け継ぎ, 家業のお菓子屋を支えた\*\*さん(昭和8年生まれ)から当時の仕事や生活の様子について話を聞いた。

#### ア けずり氷を手伝った思い出

「私は昭和8年(1933年)に今治市(いまばりし)別宮町(べっくちょう)のお菓子屋の家に生まれました。昭和18年(1943年), 国民学校4年生の時に父が急性肺炎で亡くなりました。昭和20年(1945年), 国民学校6年生の時, 終戦になり卒業後は精華女学校(現今

治精華高等学校)へ進学しました。昭和22年(1947年), 父の弟(養父)が訪ねて来て, 遊びに来ないかと言われ, ここ(松山市(まつやまし)勝山町(かつやまちょう))へ来ました。当時は, 空襲で周りは焼け野原で, バラックの小屋が立ち並び, 松山東警察署のチョコレート色に塗った建物だけが残っていました。向こうを見渡せば, 一番町まで丸見えであったことを憶えています。勝山通りは, 進駐軍のジープが通るたびに土ぼこりがあがっていました。当時, 父の弟は松山東警察署の北側, 現在の朝日生命のある場所で, バラックの小屋を建ててけずり氷屋をしていました。店といっても床は土で, 学校にあったような木のイスを置いているだけでした。寝泊りは, 店の向かいにある空襲で焼け残った労研饅頭の従業員寮を借りてしていました。夏休みの1か月間, けずり氷の手伝いをして父の弟に気に入られ, 家業を継いでくれる子どもがいなくて養女に来ないかと言われ, 昭和22年(1947年)12月25日に養女に入りました。ちょうど同じ日に, 今の場所(勝山町二丁目)へ小さな規格住宅を建て, 父と母と私が住むようになったのです。家が出来た時に, 東署の北側に建っていたバラックのお店を荷車に乗せ電車通りをごろごろと引っ張って家の前に持ってきました。それに, すだれをつるし, そこにキュウリやカボチャのつるをはわせて氷屋をしていました。

戦後は, 砂糖も何もなくだったのでタルトは作っておらず氷屋だけでした。父が毎朝, 単車に乗って製氷会社に氷を買に行きます。氷が溶けないようにドンゴロス(麻袋)にまいて持って帰ってきます。その氷をけずって, 砂糖がなかったのでシロップにはサッカリンを使って甘味をつけ, それにイチゴ色などの色をつけて出していました。おいしいものがない, 甘いものがない時代であったのでそれが飛ぶように売っていたのです。戦後で人々が甘いものに飢えていたので, 朝から晩まで売れに売れていました。多いときには1日に45貫(約168.75kg)もの氷が売れました。今でも, その時の味が忘れられないと言って多くのお客さまが来てくれます。氷の出前もしていました。父が運転する単車の後ろにまたがり両手に出前箱を持って行きます。箱の中の氷がころがらないようにバランスを取るのに必死でした。氷がおいしいので, 味を知ったお客さまから出前の注文がだんだんと来るようになりました。日赤(松山赤十字病院)からは, 一度にまとめて20個ぐらい注文が来ていました。単車で一度に20個を運ぶことはできないので, 父はオート三輪の後ろの荷台にもろぶたを積んで氷を運ぶようにしました。も

10 現在は「愛媛県における私立学校及び宗教団体並びに社会福祉事業を行うものに対し財政援助を行い, もって教育の振興及び宗教団体の講演植業に社会福祉の増進に寄与することを目的とする事業を行う」一般財団法人村瀬奉仕財団として活動が継承されている(代表者は子息の村瀬聡一郎)。

ろぶたの中に氷を入れるのですが、氷が溶けないようにふたをします。そのふたがずれないように、私が後ろの荷台に乗って押さえていました。」

イ 学校帰りにタルトを販売

「六時屋がタルトを再開したのは、昭和23年(1948年)からです。松山三越の大街道入口、現在、三越のアトリウムコートになっているところで賃加工を始めました。三越に大街道入口から入った最初の店が六時屋で、その隣はお寿司屋さんでした。当時は、お客さんから加工賃39円、メリケン粉20匁(約75g)、砂糖40匁(約150g)、卵2個を受けとり、それをタルト1本と交換していました。隣のお寿司屋さんも、お米と加工賃をもらってお寿司と交換していました。三越でタルトの賃加工を始めた時、私は松山東雲中学校に通っていました。学校が終わると、家に帰らないでそのまま三越に行っていました。たくさんのお客さんが並んでいるのですぐに『いらっしやいませ。いらっしやいませ。』とタルトを売り、その日のタルトが全部売れてから家に帰りました。

タルトは父が、家の台所を改装してあんこを練ったり、カステラを焼いたりして作っていました。しばらくして、台所を工場に、玄関を改装してお店にしました。今はこの本店の下が地下工場になっており、お菓子を作る設備も完備されていますが、当時は全部自分の家で手作りで作っていました。カステラを作るときは泡立てにしても、今はボタン1つで泡が立ちますが、当時泡立ては30分ぐらいビーター(泡立て器)でかき混ぜ、泡立てをしていました。泡立ての手伝いもよくしていましたが、30分も混ぜていると腕が痛くなりました。三越でタルトの賃加工をしていたのは、昭和25年(1950年)ころまででした。お砂糖が自由に手に入るようになってから賃加工はやめました。」

ウ 高校を卒業して女中奉公へ

「松山東雲中学校から松山東雲高等学校へ進学しました。勉強は好きでよくしていたので、高校を卒業すれば大学へ行かせてくれると思っていたのですが、父に『家業を継ぐのだから、将来は人を使っていかなければならない。人を使う人間は、まず自分が他人の飯を食べて、他人に使われなければ人の気持ちはわからない。だから他人に使われてきなさい。女の子はそれ以上勉強しなくてもよい。』と言われ、大学へ行かせてくれなかったのです。そして、昭和27年(1952年)の3月、卒業式が終わった3日後に東京へ女中奉公に出されました。同級生や友人には誰も女中奉公に行く人はいません。周囲からは、何でわざわざそんなところへ

行くのかと気の毒に思われました。勉強が好きで大学へ進学することが私の夢でしたが、私はこの六時屋を継ぐために来たので、素直に父の言う通りにしようと決意し、女中奉公に行きました。奉公先は、江東区(こうとうく)大島(おおしま)町の都営住宅に住んでいるサラリーマンの家でした。いわゆる住込み女中です。毎朝5時に起きて、七輪(しちりん)に火を起します。都営住宅には毎朝、豆腐と納豆を売りに来るので、それを買って食事の支度をします。掃除・洗濯などの家事をし、5歳と3歳と生後4か月の子どもの子守をしていました。

女中奉公は、1年間の約束だったのですが、私が奉公をしている時に、大街道支店長が結婚退職することになりました。そこで、急きょ昭和27年(1952年)12月に松山へ帰り、帰った翌日から大街道支店の責任者として働くことになったのです。そして、翌年の1月に正式に六時屋の社員になり、大街道支店長として給料をもらって働くようになりました。朝、勝山町の本店からその日に売る分のタルトやお菓子を自転車で運び、店を開けてからは売り子として店頭立ち、夜に店を閉めて、その日の売上を計算して報告するのが私の仕事でした。ちょうど映画『君の名は』が大流行した時(昭和28年)で、店の筋向いのグランド劇場という映画館へ配達に行った時には、『君の名は』を少しだけ観て帰るのがちょっとした楽しみでした。」

エ タルトと第8回国民体育大会

「昔からタルトはあったのですが、今のように全国的に有名ではありませんでした。それを父は愛媛の代表銘菓として押し出そうということで、プラカードを持って『愛媛の名産、タルト、タルト。』と言って街中を宣伝してまわったのです。昭和20年代中ごろに『愛媛の名物は何か。』を決める愛媛新聞社主催の『伊予名産二十選』でタルトがトップになりました。それから父は、『わしは、タルトと心中する』と言ってタルトの製造・販売・宣伝に一生をかけたのです。父は『愛媛県以外にタルトがあったのでは名産の意味がない。』と言ってタルトの商標権を取り、将来のためにその商標権を愛媛県菓子工業組合へ置きました。それで、愛媛の名産として有名になったのです。

戦後、いち早く全国の人にタルトが知られたのは国体があったころからだと思います。昭和28年(1953年)に第8回国民体育大会が愛媛であり、全国から多くの選手が松山に来ました。私も大街道支店で、道行く人にお茶と試食品を出して食べてもらってタルトを宣伝しました。開催中はタルトが飛ぶように売れました。

当時は今と違って、他に甘くておいしいお菓子を作るところがなかったのです。父は今治から松山までの沿線に黄色のブリキ板に黒で『六時屋のタルト』と書いた看板を20余り出していました。それを見た北海道から来た選手団は『ここだ。ここだ。』と言いながら店に入ってきて、私に『ここへ来るまでに【六時屋のタルト】と書いた看板がたくさん出ていたのですが、タルトというのはどんなおもちやですか。』と尋ねるので、タルトはおもちやではなく、こういうお菓子ですと説明し、試食品とお茶を出すと、『これは、おいしい。おいしい。』と言ってお土産に買って帰ってくれたこともありました。大街道支店のタルトが売り切れになると、勝山町の工場に行き、自転車の荷台にもろぶたを縛りつけて、その中にタルトを入れて運んでいました。自転車には大きく『六時屋のタルト』と書いたブリキの看板が付いているのです。まだ、二十歳（はたち）前の娘だったので看板の付いた自転車に乗ることが恥ずかしく思いました。松山祭りの時にも、同年代の娘さんたちは、きれいな着物を着て大街道を歩いています。私は、そこを白衣を着て、看板の付いた自転車に乗ってタルトを運んでいきます。店に入ると何も思わないのですが、勝山町から大街道までの道中が恥ずかしかったです。二十歳前のおしゃれをしたい時期でしたが、私はいつも、どこへ行っても白衣を着ていました。朝から寝るまで白衣を着て働いていました。それでも、タルトやお菓子はよく売れたので仕事は楽しかったです。」

オ 仕事をしながら子育て

「昭和30年（1955年）にお見合いで結婚しました。結婚したころは、道後（どうご）支店の支店長として働いていました。主人はこの工場で、父からお菓子作りを学んでいました。あんこの炊き方から羊羹（ようかん）の練り方までいろいろなことを教え込まれていました。当時は、道後支店の2階に住んでいました。昭和31年（1956年）に一人息子が生まれました。その時も、氷が飛ぶように売っていたのです。当時は道後温泉の朝湯が6時から開いていました。朝5時半ぐらいになると、お客さんが周りをぞろぞろと歩き始めます。朝5時に起きて準備をして、8枚ある木戸をはずしてそれを担いで横にしまってお店を開けます。昔は夜12時近くまで道後のお店が開いていたので、お店を閉めるのも夜12時ころでした。温泉も遅くまでやっていたので、閉まるぎりぎりに行きお風呂に入っていました。子どもが生まれてからは、昼の暇な時間に息子をおんぶして近くの温泉に行って、息子をお風呂に入れ、

帰って店の2階に寝させておいて店に出ていました。お店が忙しいときは、子どもが気になりながらも見に行くことができません。ちょっと手が空いた時に、見に行くついでにワーンワーンと泣いており、いつもすまないと思っていました。あまりに子どもがかわいそうなので、今度はお店の横の実演場にベッドを置いて、そこで寝かせるようにしました。ベッドの上にガラガラの音楽が鳴るおもちゃをつるして、音楽が鳴っている時は、機嫌が良いのでその間に用事をし、ガラガラの音楽が止まると、ネジをまわして、その間に仕事をしていました。近所の人が『ここは忙しいので子どもがかわいそう。』と言って子どもの面倒を見てくれることもありました。しばらくは一人で子どもの世話とお店の仕事をしていたのですが、あまりにも忙しそうなお姿を見た父が、子守の女の人をつけてくれるようになりました。それで少し楽になったのですが、まだ息子が1歳にもなっていない時、愛媛の物産と観光展が名古屋の丸栄百貨店であり、父からそれに行くように言われたのです。私はこんな小さな子どもを残してと思ったのですが、仕方なく1週間、子どもを残して物産と観光展に行ったのです。その後も名古屋や大阪の百貨店で物産展があり、その度に子どもを残して行かなければならず、つらい思いをしました。仕事をしながらの子育てで、本当に子どもには十分なことはしてやれませんでした。子どもが、小学校へ行くようになってからも、母親としては子どもの面倒を見て、勉強も見てやりたいのですが仕事、仕事でそれどころではなかったのです。学校から店番しているところへ『ただいま。』と言って子どもが帰って来ます。『今日は何を勉強したの。』と聞きながら家へ連れて上がろうとしたら、お店にお客さんが来るのです。母親としては0点であったと思います。

昭和36年（1961年）、勝山町周辺の建物が木造しかない時代に画期的な鉄筋3階建ての店舗を建て、私は本店を任されるようになりました。お店は朝6時に開け、夜10時に閉めていました。当時は年中無休でした。朝から晩までお店に出ていましたが、嫌だと思ったことはありません。仕事は本当によくやったと思います。父に『風邪引いたので今日は休ませて。』と言うと『気が緩んでいるから風邪を引くのだ。』と言われ、休ませてくれませんでした。いつから休んでいないのだろうと数えると40何日休んでいない、そんな状態でした。」

カ お菓子を通じた時代の変化

「昭和20年代後半から洋菓子も販売していました。今

でこそ洋菓子はどこでも作っていますが、当時は珍しかったのです。昭和30年に私が結婚した時には、父がウェディングケーキを作ってくれました。2段のケーキですが、結婚式でウェディングケーキ入刀があるのはかなりハイカラで最先端であったと思います。昭和32年（1957年）に愛媛新聞が取材に来ました。フランク永井の『有楽町で逢いましょう』がヒットした年です。当時は店の裏に工場があり、店から工場まで通路がありました。その通路でお客さまがケーキの出来るのを待っていて、私が工場から店に出来上がったケーキを運んでいると『私你先だ。私你先だ。』と言って奪い合うような状態でした。そのとき愛媛新聞の記者に『お客さんの注文でどんな要望がありますか。』という質問がありました。『一番ユニークだと思ったのは、お客さまから、【有楽町で逢いましょう】とケーキに書いて下さいと言われたことです。』と答えたこともありました。

クリスマス期間中は、ものすごく忙しかったです。クリスマスの1週間でケーキが3,000個売れたこともありました。父が、夜が明けるころまでかかってケーキを作ります。私達はそれに果物をのせ、サンタクロスやヒイラギの木を置いて飾り付けをしていくのです。ケーキの予約に間違いがないように確認しなければなりません。バタバタと本当に忙しかったです。クリスマス期間、子どもは親戚や知り合いの家にあずけていました。申し訳ないと思いながら、その日その日の仕事に追われていました。誕生日にケーキが出るようになったのは、昭和30年代後半からだと思います。昭和40年代以降はお決まりになってきました。今はクリスマス、誕生日以外にもお節句や母の日、入学式や卒業式と年中ケーキが売れています。

昔は甘いものが少なく、みんな奪い合うようにして食べていました。今は食べ物が豊富になり、本当においしいものしか手をつけなくなりました。父が亡くなった後は、主人が社長となり、私は専務取締役として営業を担当しました。主人がしっかりと父の教えを学んで、本当においしいお菓子を作ってくれるので、私はいつも自信を持って営業をすることができました。今は引退していますが、ちよくちよく店頭には立っています。私は生まれもお菓子屋でお菓子が大好きなうえに、『わしはタルトと心中する。』と言った父の情熱を受け継いだのだと思います。』

（愛媛県生涯学習センター編（2009）、88～92ページ）

## 12. 中国人料理人・林樹宝の役割と労研饅頭指定者組合員

既述のように、現在に伝わる労研饅頭は、倉敷労働科学研究所初代所長の暉峻義等が中国の「饅頭（まんとう）」を半分のサイズにし、少量の砂糖を加えて開発した。1929（昭和4）年のこととされている。

暉峻は、二度の満州旅行を通じて「饅頭（まんとう）」を知り、研究所で試作したこと、日本人の口に合う味が出せなかったため「中華国」から料理人・林樹宝を招いて研究し改良したものが「労研饅頭」であること、を述べている（暉峻（1930））。

「労研饅頭」が世に出るにあたって中国人料理人・林樹宝が貢献したが、林が1929（昭和4）年から1930年（昭和5）年にかけて倉敷に滞在したこと（暉峻義等博士追悼出版刊行会編（1967））や松山でも技術指導したこと（たけうち（1991）に林樹宝の写真掲載）以外の詳しい事情は分かっていない。

労研饅頭が誕生した経緯については、満州人が主食としている饅頭からヒントを得たこと、大連から林樹宝を招いて本格的な製造研究に込んだことが分かっている。

暉峻自身つぎのように記している。「満州人の常食としていもとのままの製法や形では日本人の嗜好や趣味に適さない、林（樹宝：引用者注）君が着任してから、いろいろと製法や技術上に苦心した結果、その味や形に於いて我々日本人に親しみのあるものとなるまでには相当の時日を要したのであるが、遂に「これならば」と思われる我々の饅頭が出来上がるに至った」（暉峻（1930））。

労研饅頭開発に貢献した中国人・林樹宝の帰国後については不明なままであった。ある研究会の様子を綴った筆者のブログを通じて林樹宝の孫・曾孫を知ったことについてはすでに触れた（赤間（2014））。愛媛新聞の記事（坂本敦志（2009））を見た当時61歳のある読者からの投

稿である。

「◇2日付本紙の「労研饅頭（ろうけんまんとう）日中のきずな 松山名物…」を読んで、なぜか思わず涙が出た。私は幼いころから、手押し車で売りに来ていた「たけうち」の饅頭を、何げなくおいしくいただいてきた。この記事で、その誕生秘話を知って感激した。◇今でこそ中国産というと敬遠しがちで、特に妻は表示に「中国」の文字があると、完全に拒否反応を示す。しかし、労研饅頭は、戦前、中国人の林樹宝さんがわざわざ来日して開発したとのことである。中国の職人さんに対する意識を変えないといけないと思った。◇今も頑張っている「たけうち」さんは、60周年を迎えられたという。今後、100周年、150周年を目指し、松山の名物として、この味を伝え、庶民の舌を喜ばせていただきたい」（愛媛新聞2009年8月18日）。

年齢から判断すると戦後直後のことではないかと思われ、労研饅頭が「手押し車で売りに来ていた」ことがわかる。本店と支店だけでなく、行商販売もしていたことがわかる貴重な証言である。

さて、労研饅頭誕生には林樹宝が大きな役割を果たしていた。しかし、中国から日本に来ることになった経緯、倉敷での生活と活動、帰国後の動向などはいっさい不明のままであった。たまたま2009年に林の曾孫にあたる方が日本に在住されていることがわかった（浜田紀男（2009）<sup>11</sup>）。

11 ちなみに、「饅頭の産みの親」と題した記事がある週刊誌に掲載された。「労研饅頭という饅頭が松山市で販売されている。労研饅頭は1929年頃、岡山県・倉敷紡績の労働者の栄養状態改善のために倉敷労働科学研究所が開発し、松山では松山夜学校〔その後松山城南高校を経て現在松山学院：引用者注〕が製造を始めた。饅頭の開発者には中国から招請した林樹宝さん。その子孫が福岡県で暮らしていることが分かり、林さんの人物像が明らかになると期待される。今も愛される労研饅頭誕生の秘密とは。（『週刊新潮』2009年8月27日号、「B級重大ニュース」）

発表者が発掘した林樹宝に関する新しい情報は以下のものである。

- ・1902年 山東省生まれ<sup>12</sup>
- ・1926-1931年 労働科学研究所勤務（生化学研究室所属の研究者処遇か）
- ・1931-1949年 遼寧省の日本人向け病院勤務<sup>13</sup>
- ・1949年～？年 北京の中央経済委員会より料理長として招聘
- ・1985（89?）年 北京にて死去

倉敷滞在中に山川シズエ（長崎県出身、倉敷紡績勤務）と結婚し、一男（林成基<sup>14</sup>）と孫（四男と一女（林穎））を授かる。林穎と曾孫・劉偲林（2009年当時九州大学大学院在学中）は福岡県太宰府市在住である。

暉峻は「大連から林樹宝君を研究所に呼びよせて、本格的な製造研究に進んだ」としていたが、林樹宝については息子の林成基の記録から<sup>15</sup>、うえに記したおおよその経歴が判明した。

林樹宝と結婚した山川シズエと同郷で同じ時期に倉敷紡績で働いていた森川ハナキの証言によれば<sup>16</sup>、シズエは1935年頃倉敷紡績に勤め始めたこと、林は研究者として雇われており「林樹宝先生」と呼ばれていたこと、林以外にも中国人が多数いたことなどがわかった。

労研饅頭誕生にかかわる林樹宝その人の名前と功績は歴史に刻まれている。中国の饅頭をもとに「労研饅頭」を開発し日中の絆を取り持った林樹宝に関する今回の新しい情報も依然断片でしかないが、その彼が日本人女性と結婚し、孫・曾孫が日本に在住している。

労働科学研究所、大原社会問題研究所、有隣

12 山東省栖霞県高家荘（林穎から赤間に提供された資料による）

13 撫順磁務局病院（同上）14 1930年9月長崎にて出生（同上）

15 林穎から筆者に提供された資料による。

16 同上

会などの資料には林樹宝に関する情報が含まれているかもしれない。筆者は今後とも発掘を続けていくつもりである。最後に、林樹宝・シズエ夫妻と家族写真（いずれも撮影時期・場所不明）を掲げておく<sup>17</sup>。



さて、伊藤章治は労研饅頭成立の経緯を暉峻、大原孫三郎および労働科学研究所の活動に関連した事業として位置づけている。「1921年（大正10年）、暉峻を所長とする「倉敷労働科学研究所」が発足、「温湿度と労働」「深夜業と労働」などの研究成果が発表されていく。孫三郎はこれらの研究成果をもとに、工場の壁を蔦で覆う対策、室内氷柱冷水などの対策を取り入れていった。また、同研究所が給食の改善の過程で生み出した「労研饅頭」は、栄養価の高い国民食として全国に普及した」（伊藤（2008）、114ページ）。兼田麗子も「日本人の口にあった主食代用品として、栄養バランスに配慮した労研饅頭が考案され、関西地域で販売された」こと、

17 林穎から筆者に提供された資料による。

倉敷教会の田崎牧師が宣教先の松山で夜学校の学生と奨学金充実のために製造・販売されたことを確認している（兼田（2012-2）、156ページ）。

松山での労研饅頭誕生については関岡武太郎が詳述している。

倉敷労働科学研究所の同人で心理学者の桐原葆見（しげみ）は労研饅頭誕生についてつぎのように書いていた。「国民栄養に関心を持っていた暉峻が、中国人の青年調理人の林宝樹（ママ）をつれてきて、所員の毎日の食事を調理させて、試食しながら、わが国の工場や農村の栄養改善のヒントを得ようとした。たまたま彼の作る饅頭の栄養価が、当時は錢価と称して、他の米やうどんや食パンなどと比べて最も安かった。何しろ世界的不況のどん底で、メリケン粉一袋が二円五〇銭であったから、これで饅頭をつくると、一個六〇グラムで一六二・二カロリーあって、これが一銭で出来る。これを一・二銭～一・二五銭で売れば十分引き合うので、それは米その他何よりも安かった。そこで四個五銭を小売定価として、規格条件をきめて労研饅頭という名称を与え、これを業者が商標登録して市販した。（改行）失業者が街にあふれるといった当時のことで、伝え聞いてその製造販売を望む人が各地から問合せきたので、競合をさけるために一都市一人に伝授して認可することとし、岡山、倉敷はじめ、東京、福山、松山など各地に一袋四個五銭の労研饅頭が出まわった。しかし、どこでも主に学校生徒と下級サラリーマンの中（ママ）食代用に専ら買われて、工場労働者や一般の人々からは、軽くて腹の支えにならないとかいわれて、工場でこれを主食に代用しようなどとは考えて貰えなかった。」

（桐原葆見（1962）。下線は引用者）と。

労研饅頭誕生時期については倉敷で開かれた産業衛生協議会第2回総会（1929年11月7日）の記事につぎのように記載がある。ふたたび確認しておこう。「（議長）時間ノ都合上討議ヲ打切り休憩ヲ宣ス、時ニ午後三時頃（改行）此ノ間暉峻氏労働科学研究所労研饅頭ヲ紹介シ、予メ

会員一同ニ配布セルプリントニ就イテ説明ス」。労研饅頭が北は北海道から南は九州まで全国で製造・販売されていたが、現在唯一残る松山の竹内以外の労研饅頭の詳細は不明のままである。

さきに触れたように、松山の「たけうち」創業者の竹内成一は、「何種のものに限らず評判のよいものには模造品や偽物がついて廻るものである。其種類が多い程、真価の高いことを証明している。労研饅頭も亦御多聞に洩れない、或る地方では其偽物五六種に上ったと言われている、然し倉敷労働科学研究所指定の製法により同所より分譲された酵母を使用し且つ其監督を受けて製造している店は一地方に一軒しかない、此点読者のご承知を願いたい」(たけうち(1991), 18~19ページ)として「昭和11年1月10日」発行の「労研饅頭指定者組合員名簿」(【資料6】)を掲げている(同上, 19ページ)。

この名簿の下段にある「松山市 竹内商店 竹内成一」が松山の「たけうち」である。

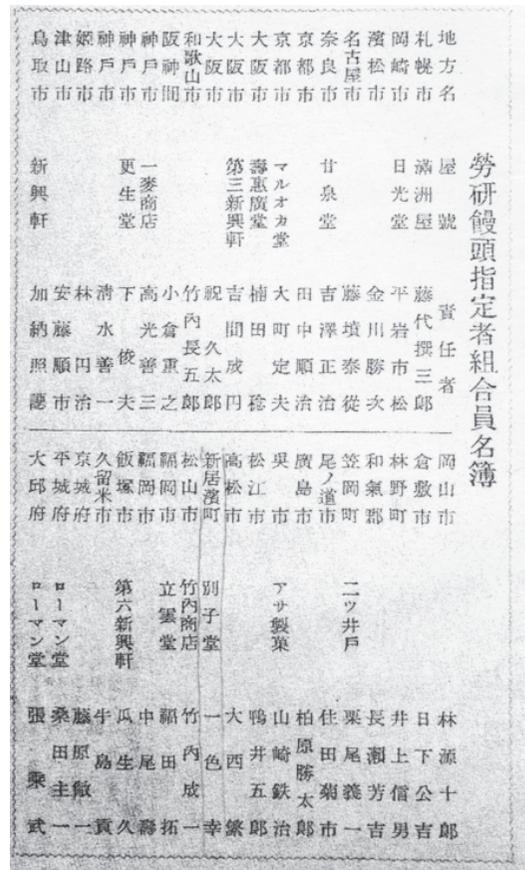
戦前期には労研饅頭は北は北海道から南は南九州、さらには朝鮮半島でも広く販売されていたことがわかる。「1936(昭和11)年発行の労研饅頭のパンフレットによると各市の指定組合員は、札幌市から久留米市まで34市および朝鮮の3市であったことがわかる」(三浦(1991), 164ページ)と紹介されている名簿の「各市の指定組合員」とは「労研饅頭指定者組合員名簿」のことである。

### 13. 倉敷・林源十郎商店

これらの指定組合員のうち確実に歴史を辿ることができるのは「岡山市 林銑十郎」と「松山市 竹内商店 竹内成一」である。

倉敷市史研究会編(2004)はこの間の事情をこう説明している。「栄養思想の普及と実践活動の具体例として、労働者の蛋白質代謝を研究することで国民の栄養問題にも着目して「労研饅頭」の名の蒸しパンを開発し、林源十郎が製造販売したことは有名である」(池田直人執筆、

【資料6】 労研饅頭指定者組合員名簿



492ページ)とし、「暉峻所長らにより倉敷で開発されたいわゆる「労研饅頭」は、「労饅(ろうまん)」とも呼ばれ、当時の倉紡女子従業員の栄養食として、また一般市民にも親しまれ広く知られるに至った。クリスチャンで無産者の運動にも理解のあった林源十郎は、一時期この製造にたずさわっていた」(坂本忠次執筆, 686ページ)と林源十郎の名前を記している。

林源十郎商店の歴史は古く1657(明暦3)年の創業である。1950(昭和25)年4月に株式会社林源十郎商店となり、1964(昭和39)年2月には林薬品株式会社になる。その後1997(平成9)年に株式会社エバルスとなり、医薬品・医療機器の卸売会社として事業展開中である。

商店および会社の継続とは別に、エバルスは、現在、倉敷美観地区に旧店舗を改装し、倉

敷生活デザインマーケット林源十郎商店を新規開設し（2012年3月20日）、第11代林源十郎を含む薬屋「林源十郎商店」を顕彰する林源十郎商店記念室を開設している（<https://genjuro.jp/index.html>）。労研饅頭の製造販売こそしていないものの、暮らしと地域に密着した企業展開として注目される<sup>18</sup>。

長江勘次郎によると、林源十郎商店は「岡山市内の一番の繁華街」にあり、小学校の購買部で労研饅頭（通称労饅）が売っていたことを回想している。「芳醇な香りのある白パンの中に黒豆が数個入っていて時にそれが浮き出ており、包み紙は中味のすいて見えるパラフィン紙のような紙で、それに、フタバ印の菱形の商標がブルーの色で印刷してあった」。さらに、「製造は本社近くの工場で、後半は製薬工場であった北方工場で造られていたという」と伝聞とともに、「昭和初期の経済不況で欠食児童のために創られた」と書いている（長江（1991）、35～36ページ）。林源十郎商店製造労研饅頭が目に浮かぶ。

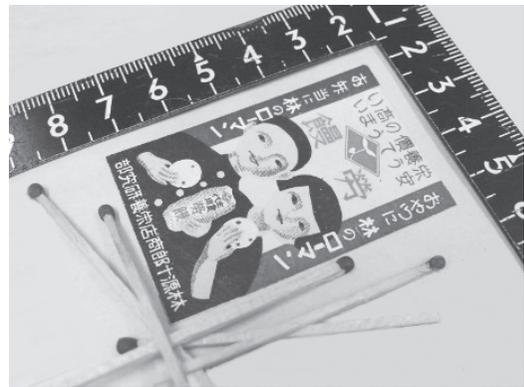
「林源十郎商店栄養研究部」名のマッチラベルを確認できる（マッチラベル蒐集家のウェブサイトから。時期など詳細は不明。<https://auxiliarylines.wordpress.com/2017/11/24/林源十郎商店栄養研究部「林のローマン」マッチ/>）。「栄養価の高い安うてうまい労饅 おやつに林のローマン お弁当に林のローマン 主食代用労饅」の文字を確認できる（【資料6】）。

林源十郎が労研饅頭の製造販売のきっかけはクリスチャンとして関わった倉敷教会を介してであった。のちに松山での伝道で労研饅頭の橋渡しをした田崎健作牧師である。

「前科数犯の某君を私の宅に一月餘り御世話をしたが、其時却々仕事がないので私共夫婦も困

18 ミュージアムカフェでは「倉敷黒豆饅頭（労研饅頭）」を提供していたことがある。この建物の右側の門を入った右側に「林源十郎商店発祥の地」の石碑が建っている（2012（平成24）年3月20日建立）。

【資料6】 林源十郎商店栄養研究部マッチラベル



って居た時、森茂夫君を通じて暉峻義等博士が労働科学で研究ずみの支那のマンジュウの製法を某君に傳授してもらったが、資金がないので困って居た時、林さんが同情して「ソレちや私が一切引受けて本人の世話し、マンジウの製作も致しましょう。薬の広告台だと思って」牧師の世話好きにも困ったものだと思いつつ、世に送り出して下すったものが今日のローケンマンジュウである」（田崎健作「林翁の断層」『林翁の片影 林源十郎』1937年、猪原（2019）②、43ページから孫引き<sup>19</sup>）

林銑十郎商店の労研饅頭製造・販売は戦時中の食料統制下で中止を余儀なくされた。呉のアサ製菓の創業者・山崎文四郎<sup>20</sup>の場合もキリスト教会の布教を通じて知った林源十郎商店の口添えと暉峻義等の製造許可を得て「栄養パン」として製造販売した。呉の軍工廠納入が実現したため終戦直前の空襲による工場全焼まで製造を続けたという（猪原（2019）②、43～44ページ）。

さきの「労研饅頭指定者組合員名簿」にある「倉敷市 日下公吉」は、倉敷労働科学研究所付近にあり、倉敷競馬場にも近い、労研饅頭を最初に製造販売した日下牧場と思われる。倉敷

19 猪原（2019）②には2葉の「林源十郎商店の労研饅頭製造風景（林家所蔵アルバム）」写真が紹介されている（43ページ）。おそらく初めて紹介された貴重な写真である。

20 山崎には、『私の歩んだ道上：生いたちから古希へ』1966年、の著書がある。筆者未見のため、猪原（2019）②の記述による。

天文台近くの借家に住んでいた暉峻義等の朝食は毎朝配達された日下牧場製造の労研饅頭であった。林樹宝もこの近所に住み、「小さな軒家を借りて料理店をやっており、両手で生地を伸ばすとみるみる麺になる、というような技術の持ち主だった」ことも伝わっている（猪原（2019）③, 42ページ）。

「和氣郡 長瀬芳吉」から指定者の権利を譲渡してもらい、つい最近まで営業していたのが地元で「ローマン」で知られた「壬生ベーカリー」（岡山県備前市）である。創業は1936（昭和11）年である。「壬生ベーカリー」は2020（令和2）年4月廃業し、たけうちの労研饅頭が唯一現在に残る労研饅頭になったが、戦時中は原料入手の困難さや贅沢品扱いもあり製造販売を中止し、戦後再開した歴史をもつ。

備前のニブベーカリーが閉店 84年間営業友人らがお別れの会」（山陽新聞2020年4月6日 → <https://www.sanyonews.jp/article/1001147>）および「倉敷起源の「労研饅頭」継承を 備前の洋菓子店閉店、惜しむ声」（山陽新聞2020年4月16日 → <https://www.sanyonews.jp/article/1004466>）と地元紙がその廃業を惜しんだ。「旧全国労研饅頭組合正式認可第25号」の記録を確認できる。プレーン、甘酒、紅麴、抹茶、ラムネ味などがあり、餡入りと餡無しがあった。くらしき朝市「三斎市」や商業施設「ハートランド倉敷」では丹生ベーカリーと倉敷商業高校生が「倉敷浪漫」の商品名でローマンを販売していたこともある。また、倉敷美観地区や岡山市内のデパートでの定期販売もあった。

ほかにも光本栄久保（みつもと・えくぼ）堂の「ローマン」があり、スーパーでも販売されていた（光本栄久保堂は「創業90年の老舗 餅、赤飯製造業」[ホームページより]）であるが、現在も「ローマン」を製造しているかどうかは未確認）。

さらに、岡山市に三笠屋があり「三笠屋のろうまん」を販売していた。松山の「たけうち」の酵母菌を分けてもらい、2007年12月21日まで営業していた。かつては岡山済生会病院や岡

山大学附属病院でも販売されていた。ちなみに、三笠屋は歌手の松永（宮武）希の実家である。三浦（1991）によれば、「岡山では最初は下日（日下か：引用者注、三浦（1980）では「日下」）牧場が「労研饅頭」を製造販売していたが、いまはローマン三笠屋が市販している。JR岡山駅でも現在、「労研饅頭」を駅売りしている」（165ページ）とある<sup>21</sup>。なお、三浦（1980）および三浦（1991）では複数箇所「林樹宝」を「林宝樹」と表記している。

#### 14. 労研饅頭の記憶

労研饅頭に関する史資料の多くは岡山、倉敷、松山に残っている。労研饅頭が彼の地で最近まで、あるいは現在も製造販売されてきたからである。それ以外でも断片的ながら労研饅頭の記憶が記録されている。

たけうち（1991）には労研饅頭が受容された一端を知ることができるエピソードがある。秦克彦（当時日本キリスト教団紅葉坂教会 [横浜]）「教会の歩みと私」では、「ある時期、1940年前後、日曜日毎に礼拝後玄関左奥のその階段の手摺の上に平たい木箱をのせてローケンマントウ（労研饅頭）と名づけられたふかしパンのような饅頭を売る会員がおられた。金子梅吉さんという、あまり背の高くないがっちりした方が着物姿でニコニコしながら手渡して下さった一個50銭だったか」（たけうち（1991）、26ページ）とあり、横浜の教会で販売されていたことがわかる。秦克彦の父親は1954（昭和29）年8月から連続7期同志社の理事長をつとめたことがある秦孝治郎<sup>22</sup>であり、秦家は「横浜市六角橋」に

21 倉敷市史研究会編（2004）には「ろうまん（三笠屋製造）」の写真（白黒）が掲載されている（坂本忠次執筆、686ページ）。

22 「同志社理事・監事・評議員一覧表（1936～39年度）」（田中智子「戦時同志社史再考——運営体制の分析から——」同志社大学『キリスト教社会問題研究』第62号、2013年）の秦孝治郎の略歴欄には「神奈川県出身 [滋賀県出身] 同志社普通学校及同志社大学経済

自宅があった。「1940年前後」にあたる時期には秦孝治郎は朝日スレート（現朝日石綿工業）株式会社創立入社後取締役社長・相談役をつとめていた（1923（大正12）年12月～1950（昭和25）年8月）。秦孝治郎は同志社普通学校に入学し、1912（明治45）年に同校を卒業している。在学中には京都教会の書記をして学費自給したと伝わる。1916（大正5）年、同志社大学政治経済部経済学科を卒業し、久原鉱業に就職する。その頃からのライフワークが露天・縁日の研究であり、遺稿をもとに坂本武人が整理して出版した<sup>23</sup>。

秦孝治郎は10代に横浜紅葉坂教会に入入りしていたことがあり、横浜在住時には「日曜日毎に礼拝」していたことが想像できる。1921（大正10）年7月から日本連合基督教共励会の会長、1951（昭和26）年からは万国連合基督教共励会副会長をつとめた。「労研饅頭指定者組合員名簿」には横浜の組合員は見当たらない。紅葉坂教会で金子梅吉製作（？）の労研饅頭が販売されていたことは間違いなく、倉敷教会および横浜紅葉坂教会との接点があったことを想像させる（秦克彦「父を語る」、奥村龍三「秦さんの意志の強さ——その円満な人格を偲ぶ——」および「秦孝治郎氏略歴」（「秦孝治郎前理事長追悼号」『同志社時報』第49号1973年6月、坂本武人「秦孝治郎」（『同志社時報』第82号、1987年3月）を参照した）。

「労研饅頭指定者組合員名簿」（【資料6】）に「浜松市 金川勝次」の名が見える。米田一夫「ローマン」によると、「昭和10年頃浜松一中へ、毎日昼休みに此の労饅を売りにきていた人がいた」（たけうち（1991）、32ページ）という。残念ながらそれ以上のことは不明である<sup>24</sup>。

科卒業、久原鉱業ニ入社、更ニ塩屋商店経営、現朝日スレート株式会社専務取締役、〔日本工材株式会社取締役社長、横浜英語学校々長〕とある（148ページ）。<sup>23</sup> 『露天市・縁日市』白川書院、1977年11月、のちに、中公文庫、1993年8月。ほかの著書に『年輪の足跡』（詳細不明）、『吾兎の追年』（自費出版か、1936年）などがある。

<sup>24</sup> オリジナルは、米田一夫著『亡羊』（発行元不明、

1931（昭和6）年、旧制奈良中学（現奈良高校）入学の梅木春和（当時護国神社・林神社（漢國神社）宮司）は「昭和6年入学した奈良中学の古川校長は、大のローケンマントウのファンにて、5年間給食におやつ（原文傍点）に当時の中学生たる私どもにとりまして、ローケンマントウ健在なり！の感を深くした次第」・「私どもの、お弁当であり間食であり、点心でありました」と書く（たけうち（1991）、36～37ページ）。古川校長は「労研饅頭指定者組合員名簿」にある「奈良市 甘泉堂 吉澤正治」から納入していたのだろうか。ちなみに、林神社は最初に日本に饅頭を伝えた林浄因（りん・じょういん）を祀っており、饅頭塚や饅頭祭があるという。春木の手記は1988（昭和63）年春の選抜高校野球で初出場で初優勝した宇和島東高校を特集した『週刊朝日』（1988年4月22日号）「四国四面をひた走る」「宇和島東高校初優勝・瀬戸大橋開通記念」のグラビア特集および松山の紹介「素朴な味が自慢の労働研究（ママ）饅頭」を見たことがきっかけになっている。

当時温泉郡浅海村（現松山市浅海）から汽車通学をしていた松山中学生・高橋信幸は、早弁した後昼食に「一個5銭」の労研饅頭を「定って3個」買ったこと（「労研饅頭と私」、たけうち（1991）、29ページ）、同じく松山中学生の八木正忠も「当時松中では医務室の一角に労研の校内販売をするところがあった」こと（「労研饅頭の思い出」、同上、31ページ）、をそれぞれ回想している<sup>25</sup>。何度か触れたように、「当初、一食分4個5銭。安価で栄養価が高く好評を博し、松山市内諸中等学校の売店、歩兵第22連帯の酒保にも販路が開かれるようになった」（関岡（1985）、654ページ）ことを示している。ただ、「一個5銭」はおそらく高橋の記憶違いと思わ

1988年9月）である。筆者未確認のため、たけうち（1991）から孫引きしている。

<sup>25</sup> 高橋および八木の回想はもともと旧制松山中学四五会の文集『きずな』掲載されたものである。筆者未確認のためたけうち（1991）から孫引きした。

れる。

種田山頭火は「ひよいと四国へ晴きつてゐる」と詠み一草庵に居を定め約10カ月間禪の修業と句作に勤しんだ。1939(昭和14)年のことだ。日記には、「労研饅頭(ろうけんまんとう)一包——十銭, 胡瓜一本——十銭」(1940(昭和15)年7月22日, 村上護編『山頭火 一草庵日記・随筆』山頭火文庫4, 春陽堂書店, 2011年8月, 134ページ)の購入記録がある。ほかにも労研饅頭とは特定できないものの、「十銭饅頭」(同年3月21日, 同上書, 96ページ)——金額からすると労研饅頭の可能性がある——, 「マンヂユウ」(同年8月29日, 同上書, 173ページ)も確認できる。山頭火が足繁く通った大街道一丁目にあった「うどん亀屋」のうどんは一杯5銭の時代であり<sup>26</sup>, 食いしん坊の山頭火は労研饅頭を8個買って何回かに分けて一人で食べたのだろう。【補説4】

#### 【補説4】円本と十銭均一商品の時代

労研饅頭が「一食分四個五銭」・「一包十銭」で販売されていた時代は、日本ではちょうど一冊一円の円本全集発行と今でいう百均というべき十銭均一商品の流行と重なっている。

円本は改造社版『現代日本文学全集』(1926(大正15)年)を嚆矢として文学全集, 経済学全集, マルクス・エンゲルス全集などが発行され, 1930(昭和5)年過ぎにはブームが終息した。このうち改造社版マルクス・エンゲルス全集(1928-1935年, 全32冊)は日の目を見たが, これに対抗して企画された同人社, 弘文堂, 希望閣, 岩波書店, 叢文閣5社による聯盟版は実現しなかった。2つの全集企画は全国紙だけでなく地

26 戦前期に松山ではよく知られており, 「椿さんにお参りして, いにし(婦り)に亀屋の“しっぽく”食わなんたら御利益がない」とまでいわれた。三階建ての建物で煙突が名物だった。戦災で煙突だけが残ったが, のち都市計画の道路拡張のさい取り壊された。1935(昭和10)年ごろ, うどん5銭, しっぽく15銭, 肉かけ15銭, 五目10銭, しっぽくの“だいまあし”(台増し。うどん玉が2つ入っていた)20銭, 酒一合12銭だった。亀屋の北隣にあった洲之内陶器は作家で画廊経営をしていた洲之内徹の生家だった。ここも道路拡張で道路になった(池田洋三(1975), 13ページ, 池田洋三(2002), 16ページ)。

方紙でも予約購読者獲得のための広告合戦が繰り広げられた。マルクス・エンゲルスも円本ブームの波にのまれてしまった。円本は先行して流行した円タク(一円タクシー)に因む。岩波文庫星一つ(100ページ)20銭の登場は1927(昭和2)年7月であり, 円本登場と無関係ではない。

また, 十銭均一商品の登場はさまざまな関連造語を生み出し, 大量生産・大量消費の先鞭をつけた。たとえば, 織田作之助著『世相』にこんな描写がある。「もう十年にもなるだろうか, チェリーという煙草が十銭で買えた頃, テンセン(十銭)という言葉が流行して, 十(テン)銭寿司(ルビは原文:引用者注), 十(テン)銭ランチ(ルビは原文:同上), 十銭マーケット, 十銭博奕, 十銭漫才, 活動小屋も割引時間は十銭で, ニューズ館も十銭均一, 十銭で買え, 十銭で食べ十銭で見られるものなら猫も杓子も飛びついたことがある」(初出:『人間』1946(昭和21)年4月号, 青空文庫から引用)。

「十銭」を「テンセン」と呼ぶのは, 「均一店の世界的元祖」(『十銭均一店と其の仕入研究』仕入案内社・百貨連盟商報社, 1931(昭和6)年11月, 国立国会図書館デジタルコレクション<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1090419>, 2ページ)であるアメリカ・ウールウオーズ(上掲書での表記, Woolworth)が始めた ten cent store の10セントを振ったものだ。十銭均一店は個人商店や露店で先行し, アメリカでの事例を参考に日本で最初に展開したのが高島屋大阪長堀店とされる。1925(昭和6)年には関西14店舗, 関東12店舗, 翌1926(昭和7)年には関西13店舗, 関東12店舗を新規オープンするほどの急拡張を遂げた。その後は「丸高均一店」として均一店を分社化し, 東海地方にも進出し, さらに出店を増やした(米澤光司「戦前にあった100均ショップ:『均一店』」(<https://yonezawakoji.com/takashimaya-kinitustore/>)参照)。1939(昭和14)年~1941(昭和16)年をピークに, 第二次世界大戦による物資不足により1944(昭和19)年には高島屋135年史編集委員会編『高島屋135年史』(高島屋, 1968年9月)には大正橋店, 野田阪神店の「10銭20銭50銭ストア」, 心齋橋店, 「10銭ストア」の写真が掲載されている。

『十銭均一店と其の仕入研究』(仕入案内社・百貨連盟商報社, 1931(昭和6)年11月)には, 「高島屋十銭均一商品の大」として10銭均一商品のリストがある。これによると, 「玩具」38種類, 「文房具」57種類, 「洋品雑貨」18種類, 「化粧品雑貨」12種類, 「子供用雑貨」

8種類、「糸物類」13種類、「硝子器」6種類、「日用品」7種類、「金物」87種類、「家庭用品」70種類である(同上、46～55ページ)。「十銭均一は、商業の常道である薄利多売の鉄則の下に、強く生くのである」(71ページ)。井上寿一(2011)はデパートでの十銭均一売り場の出現とそこに足を運ぶ消費者を大衆消費社会の象徴として分析している。

また、『値段史年表 明治・大正・昭和』(朝日新聞社、1988年6月)によれば、労研饅頭販売当時(1931(昭和6)年)、東京の駄菓子屋で売られている並物のまんじゅう1個(昭和22年まで1個15匁、以後は1個50グラム)、2銭～6銭であった(大正12年から昭和22年まで)。郵便料金が手紙で3銭(15グラムまで)、はがきで1銭5厘、ラムネ1本(東京での小売価格)が5～6銭の時代である。また、小学校教員初任給45～55円、米一升(約1.5キログラム)23銭の時代といえらば労研饅頭の相場が実感できようか。

労研饅頭の値段は、「黒大豆入 4ケ5銭(一包)」(1931(昭和6)年10月6日)、「労研(労研饅頭のこと：引用者注)40円→50円」(1980(昭和55)年3月1日)、「労研(同上)1ケ60円から70円へ」(1989(平成元)年3月1日[同年4月1日からの消費税3%導入に対応])の記録が残る(たけうち(1991)、「年譜」)。この時期に対応するラムネ1本(東京での小売価格)は、5～6銭(昭和6年)、100円(昭和55年)[昭和21年1円55銭、昭和22年6円50銭、昭和25年13円、昭和40年15円、昭和49年50円、昭和53年80円]、『値段史年表 明治・大正・昭和』)。

北条出身の作家・早坂暁はこう書いている。「驚きました。“たけうち”の労研饅頭と僕とが同年代だそうです。(改行)ことして60歳。ほんとは僕のほうが一年近く上なんです、まあ同級生と言っていていいでしょう。(改行)そういえば、僕の記憶の一番深いところにローケンマントーは、どしん(原文傍点)と存在しています。僕が松山中学校へ入学したころは、太平洋戦争の真只中で、とにかく“ひもじい”季節でした。ひもじいのに、軍事訓練や、勤労奉仕で土運びをさせられるのですから、たまったものではありません。その時に僕たちを救ってくれたのが、ローケンマントー君です。決死隊が松山中学の垣根を越えて、毎日のようにローケン

マントーの買い出しに走りました。(改行)あの時の、嬉しい美味(原文ルビ)しさは今も変わっていない。東京の連中に食べさせると、例外なく「ああ懐かしい! こういうのを食べたかった」と言う。思えば、わが同級生は、懐かしくも、そして失われかけている良き日本の味といえるでしょう」(「わが懐かしき同級生」, たけうち(1991), 1ページ)。

早坂在学中の松山中学は後継校の現松山東高校がある持田町にあった(1916(大正5)年4月2日に二番町から移転)。当時労研饅頭を扱う竹内商店は持田町に本店と大街道に支店があった。本店あるいは支店であっても当時の健脚少年たちにとってはおてのものだったろうが、持田町からの「買い出し」には本店が至近であり、「決死隊」はここに通ったにちがいない。中学近くの商店に並んでいた労研饅頭の可能性もある。

早坂の自伝的青春譜『ダウタウン・ヒーローズ』ではヤクザのクチ健と対峙する場面でこういふ。

(クチ健)「ワシの名は、クチ健や」  
(早坂)「クチケン? ローケン饅頭(原文ルビ)なら知っとるけどな」

今でも労研饅頭は松山で売っている。労働研究所が開発したパンで、戦前から今までも、素朴な風味で生き残っている。

ヤクザ相手に冗談をいうのは、ダイナマイトのそばで焚火(原文ルビ)するのと同じだ。

クチ健は素早く懐(原文ルビ)に手を入れると、もうギラッとした匕首(原文ルビ)を握りしめていた。朱塗りの轆轤(原文ルビ)である。

(クチ健)「お前を殺すと、三人目や」

クチ健の体からも凄いの殺気が放射している。

(後略)

(早坂(2010), 258～259ページ)

「労研饅頭よりもワシのほうが上だ」とか返

してくれたらクチ健評は上がったはずだ。道後に住んでいた「クチ健」にとっても身近だった労研饅頭もこの時にはそれを思う余裕がなかったようだ。「クチ健」に「ローケン」は通じず、火に油を注いでしまったようだが、旧制松山中学から旧制松山高校に進んだ早坂にとっては「～けん」といえば「ローケン」だった。労研饅頭は泣く子も黙る懐に匕首をしのばせていた松山の顔役と堂々と対決していた。

1935（昭和10）年ころの松山市内八坂地区の庶民生活の思い出に労研饅頭が登場する。

### イ 八坂

八坂地区は松山城の南東に位置し、石手川沿いであって、中の川がこの地域の真ん中を貫流している（図表2-2-3）。この石手川や中の川は、子供たちにとってこの上ない格好の遊び場だったという。

#### （ア）ガキ大将と共に

「（松岡さん）昭和10年（1935年）ころは、就学前の子供でも小学生や高等科の者の後にぞろぞろついてきて、一緒に遊んだりもしよったです。このころは親分というかがキ大将というか、仲間を取り仕切るだけかがいましたよ。大

抵は高等科の者でした。この唐人町（とうじんまち）1丁目（図表2-2-3）から中の川にかけては<sup>かすりや</sup>緋屋（糸を染め、反物に織る伊予緋の製造業者）がたくさんありました。その中の金持<sup>しんだてはし</sup>の息子がガキ大将<sup>たいこ</sup>でした。新立橋<sup>しんたてはし</sup>の近くで、太鼓饅<sup>まん</sup>（今川焼きのこと）や<sup>ろうけんまんとう</sup>労研饅頭（\*2）を売りよった。ガキ大将はそれをいつも買ってこさせて、必ず皆に分けてくれよった。ほやから、皆言うこともよく聞いたし、いじめられることはほとんど無かったね。今の子供は学校から帰って、皆と一緒に遊ぶことないでしょう。外で走り回る姿などほとんど見かけないですよ。」

\*2：小麦粉を練り、酵母を入れて発酵させ、蒸して仕上げた饅頭。労研饅頭の名称は、倉敷労働研究所長<sup>くら</sup>暉峻義等（てるおかぎとう）氏が、中国の饅頭を元に考案したことによる。詳しくは『愛媛の技と匠』参照（愛媛県生涯学習センター編（1998）：引用者注）。

（愛媛県生涯学習センター編（1999），  
223～224ページ）

証言している松岡理三郎は1921（大正10）年生まれの当時77歳で、富久町老人クラブの会長をしていた。唐人町（現在の永木町）に生まれ兵役後家業のガラス屋を継承しながら八坂公民館で活躍した。店は地図中の唐人町一丁目の一角にあった。地図は1927（昭和2）年ごろのものであり、労研饅頭誕生以前である。石手川に架かる中村橋の北に夜学校を確認できる。夜学校に併設されていた労研饅頭の店で買ったのだろうか。この地には1894（明治27）年10月から1982（昭和57）年3月に北久米町に校舎新築移転するまで松山夜学校、松山城南高等学校があった。現在ここには「松山夜学校発祥の地」の石碑が建つ。

池田洋三（1975）および同（2002）には「夜間中学」の項目で港町一丁目、同二丁目の歴史と風景を伝えている。

普通夜学校、松山夜学校の後身である松山学院高等学校では創立日記には、当時の歴史を追体験すべく「芋がゆ」が振る舞われ、紅白の労

図表2-2-3 昭和2年頃の松山市八坂地区及び周辺



研饅頭が配られる。労研饅頭の中には餡だけではない。歴史がどっさり詰まっている。

【文献】(著者名等の五十音順)

- ・赤間道夫(2014)「(研究発表) 労研饅頭誕生と「労働科学」の接点——中国人料理人・林樹宝を中心に——」第3回大原孫三郎・總一郎研究会, 2014年12月6日, 倉敷市民会館大会議室
- ・朝日新聞(2007)「『牢獄』の女工たちを救え」(『朝日新聞』2007年10月10日)
- ・伊藤章治(2008)『ジャガイモの世界史——歴史を動かした「貧者」のパン——』(中公新書, 2008年1月)
- ・池田洋三(1975)『わすれかけの街——まつやま戦前——』(愛媛新聞社, 1975年1月)
- ・池田洋三(2002)『わすれかけの街——松山戦前戦後——』(愛媛新聞社, 2002年6月)
- ・井上寿一(2011)『戦前昭和の社会1926-1945』(講談社現代新書, 2011年3月)
- ・伊藤章治(2010)『サツマイモと日本人——忘れられた食の足跡——』(PHP新書, 2010年10月)
- ・犬飼亀三郎(1975)『大原孫三郎父子と原澄治』(倉敷新聞社, 1975年9月)
- ・猪原千恵(2007)「『労研饅頭』の成立とその背景」(岡山市デジタルミュージアム『岡山びと』第2号, 2007年3月)
- ・猪原千恵(2019)「労研饅頭の社会史①労研饅頭の誕生」(『労働の科学』第74巻第10号, 2019年10月), 「同②労研饅頭の流行」(同上第74巻第11号, 2019年11月), 「同③暉峻義等の考えた食と労働」(同上第74巻第12号, 2019年12月)
- ・愛媛県生涯学習センター編(1998)『愛媛の技と匠——昭和を生き抜いた人々が語る——』(愛媛県生涯学習センター地域文化調査報告書平成9年度, 1998年3月)
- ・愛媛県生涯学習センター編(1999)『愛媛のくらし——昭和を生き抜いた人々が語る——』(愛媛県生涯学習センター地域文化調査報告書平成10年度, 1999年3月)
- ・愛媛県生涯学習センター編(2009)『えひめ, 女性の生活誌——平成から昭和へ, 記憶でたどる原風景——』(愛媛県生涯学習センターえひめ地域学調査報告書平成20年度, 2009年3月)
- ・愛媛県史編さん委員会編(1985)『愛媛県史学問・宗教』(愛媛県, 1985年3月)
- ・愛媛県史編さん委員会編(1986-1)『愛媛県史芸術・文化財』(愛媛県, 1986年1月)
- ・愛媛県史編さん委員会編(1986-2)『愛媛県史近代 上』(愛媛県, 1986年3月)
- ・愛媛県史編さん委員会編(1988-1)『愛媛県史近代 下』(愛媛県, 1988年2月)
- ・愛媛県史編さん委員会編(1988-2)『愛媛県史社会経済5 社会』(愛媛県, 1988年3月)
- ・愛媛県史編さん委員会編(1988-3)『愛媛県史県政』(愛媛県, 1988年11月)
- ・裴富吉(1997)『労働科学の歴史——暉峻義等の学問と思想——』(白桃書房, 1997年9月)
- ・大内兵衛(1960)「偉大なる財界人——大原孫三郎は何を残したか——」全国統計大会講演(1960年12月2日)大内(1963)所収
- ・大内兵衛(1963)『高い山——人物アルバム——』岩波書店
- ・押本直正(1996)「豪州米と米国米のルーツ——高須賀穰と西原清東の功績——」(国際協力事業団『移住研究』第33号, 1996年4月)
- ・太田由美子(2018)「倉敷大原家と愛媛のつながり——「クラレ創業者」大原孫三郎・總一郎父子と二人の伊予人——」(『松山百点』第322号, 2018年9月1日号)
- ・兼田麗子(2003)『福祉実践にかけた先駆者たち——留岡幸助と大原孫三郎——』藤原書店
- ・兼田麗子(2009)『大原孫三郎の社会文化貢献』成文堂
- ・兼田麗子(2012-1)『戦後復興と大原總一郎——国産合成繊維ビニロンにかけて——』成文堂
- ・兼田麗子(2012-2)『大原孫三郎——善意と戦略の経営者——』(中公新書, 2012年12月)
- ・鎌田貞雄編(1995・2001)『二神喜十先生を偲ぶ 喜びよろこべ』(非売品, 初版1995年8月; 再版2001年8月)
- ・桐原葆見(1962)「[筆名Q] 労研饅頭の社会史」(『労働の科学』第17巻第4号, 1962年) [労研デジタルアーカイブ <https://darch.isl.or.jp>]
- ・桐原葆見(1971)「労研のおいたち——創立から倉敷時代 労働科学の誕生——」労働科学研究所編(1971)所収
- ・久保田満里子(2016)『豪州米作の祖の妻——高須賀イチコの物語——』(ブイツーソリューション, 2016年10月)
- ・倉敷市史研究会編(2004)『新修倉敷市史』第6巻近代(下)(山陽新聞社, 2004年3月)

- ・ 齊藤 一 (1971) 「敬堂大原孫三郎氏のヒューマニズムと科学尊重——「労働科学」創設への思想的道程——」労働科学研究所編 (1971) 所収
- ・ 酒井一博 (2009) 「社会を変革する労働科学の歴史と今後の展開」(『大原社会問題研究所雑誌』第606号, 2009年4月)
- ・ 酒井一博 (2013) 「(報告) 倉敷労働科学研究所の設立の頃」(第62回労働衛生史研究会, 2013年5月15日, 愛媛県民文化会館; 『産業衛生学雑誌』第55巻第5号, 2-13年9月, 所収)
- ・ 坂本敦志 (2009) 「労研饅頭 日中のきずな」(『愛媛新聞』2009年8月2日)
- ・ 坂本忠次 (2007) 「大原社研と倉敷労研」(山陽学園大学・山陽学園短期大学社会サービスセンター編『日本のイノベーション 岡山のパイオニア1——2007年公開講座講演集——』(吉備人出版, 2007年11月)
- ・ 浅敷よし子 (1983) 『永遠なる青春——ある保健婦の昭和史——』ほるぷ出版 (青春社)
- ・ シンズ, デイビッド (Sissons David) (1979) 「ある移民の一族」(国際協力事業団『移住研究』第16号, 1979年3月)
- ・ シンズ, デイビッド (Sissons David) (訳者不明) (1984) 「1871~1946年のオーストラリアの日本人」(国際協力事業団『移住研究』第10号, 1974年4月)
- ・ Sissons David (1998), 'Selector and his Family' (全豪日本クラブ記念史編集委員会編『オーストラリアの日本人——一世紀をこえる日本人の足跡——』全豪日本クラブ, 1998年11月)
- ・ 城山三郎 (1997) 『わしの眼は十年先が見える——大原孫三郎の生涯——』新潮文庫
- ・ 杉田菜穂 (2012) 「日本における社会衛生学の展開——暉峻義等を中心に——」(大阪市立大学経済学会『経済学雑誌』第113巻第1号, 6月)
- ・ 鈴木不二一 (2009) 「「労」と「研」のつく饅頭は、「結合の力」の味がした」(日本労働組合総連合会『連合』2009年11月号)
- ・ 関岡武太郎 (1985) 「労研饅頭」(愛媛県百科大事典編集委員会編『愛媛県大百科辞典』下巻, 愛媛新聞社, 1985年6月)
- ・ 関岡武太郎 (1991) 『わが反省と城南』(非売品, 1991年6月)
- ・ 高橋昌郎 (2003) 『明治のキリスト教』(吉川弘文館, 2003年2月)
- ・ たけうち (1991) 『労研饅頭と共に60年』(たけうち, ユニオン社, 1991年11月)
- ・ 竹内信司 (2013) 「(報告) 労研饅頭の由来」(第62回労働衛生史研究会, 2013年5月15日, 愛媛県民文化会館; 『産業衛生学雑誌』第55巻第5号, 2-13年9月, 所収)
- ・ 竹中正夫 (1988) 「初期の同志社と松山のめぐりと」(同志社大学人文科学研究所キリスト教社会問題研究会『キリスト教社会問題研究』第36号, 1988年3月)
- ・ 暉峻義等 (1920) 「「合理的労働」の見地より観たるテーロイズムの批判」(『中央公論』第35年第5号 [労働科学研究所編 (1971) 所収])
- ・ 暉峻義等 (1924) 「労働科学について」(『労働科学』第1巻第1号 [労働科学研究所編 (1971) 所収])
- ・ 暉峻義等 (1930) 「「労研饅頭」に就て」(『労働科学』第7巻第1号, 1930年)
- ・ 暉峻義等博士追悼出版刊行会編 (1967) 『暉峻義等博士と労働科学』(暉峻義等博士追悼出版刊行会, 1967年)
- ・ 土井中照 (2004) 『愛媛たべものの秘密——うまい話にはウラがある——』(アトラス出版, 2004年8月)
- ・ 同志社大学人文科学研究所編 (1965) 『熊本バンド研究——日本プロテスタンティズムの一流流と展開——』(同志社大学人文科学研究所研究叢書, 1965年8月; [新装版] みすず書房, 1997年9月)
- ・ 長江勘次郎 (1991) 「労研饅頭と生菓屋」(たけうち (1991) 所収)
- ・ 中山いづみ (2008) 「大原社会問題研究所と労働科学の誕生」(『大原社会問題研究所雑誌』第591号, 2008年2月)
- ・ 二宮源兵 (1963) 「同志社歴史散歩 松山」(『同志社時報』第7号, 1963年12月)
- ・ 日本キリスト教団今治教会 (2009) 『創立百三十周年記念誌』(2009年9月)
- ・ 日本キリスト教団伊予小松協会 (1985) 『教会創立百周年誌』(1985年5月)
- ・ 日本基督教団松山教会 (1986) 『松山教会百年史稿』(1986年2月)
- ・ 二村一夫 (1989) 「大原社会問題研究所の70年」(『大原社会問題研究所雑誌』第363号, 1989年2月) [『二村一夫著作集』第8巻「労働関係研究所の歴史・現状・課題」所収]

- ・二村一夫 (1994) 「(講演) 大原社会問題研究所を創った人びと」(大原社会問題研究所創立75周年記念集会, 1994年2月9日) [『二村一夫著作集』第9巻「大原社会問題研究所をめぐる人びと」所収]
- ・二村一夫 (2008) 『労働は神聖なり, 結合は勢力なり——高野房太郎とその時代——』(岩波書店, 2008年9月)
- ・二村一夫 (2009) 「(報告) 大原社会問題研究所の創立をめぐる」(大原社会問題研究所創立90周年記念フォーラム, 2009年10月27日) (『大原社会問題研究所雑誌』第623・624合併号, 2010年9・10月) [『二村一夫著作集』第9巻「大原社会問題研究所をめぐる人びと」所収]
- ・浜田紀男 (2009) 「労研饅頭から見えてくるもの」(近代史文庫『えひめ近代史研究』第65号, 2009年11月)
- ・浜田紀男 (2013) 「(報告) 労研饅頭について」(第62回労働衛生史研究会, 2013年5月15日, 愛媛県民文化会館; 『産業衛生学雑誌』第55巻第5号, 2-13年9月, 所収)
- ・早坂暁 (2010) 『ダウタウン・ヒーローズ——国敗れて, ああ, 松山『坊ちゃん』記——』(早坂暁コレクション15, 勉誠出版, 2010年3月; 初出, 新潮社, 1986年9月)
- ・平賀拓哉 (2002) 「労研饅頭」(『朝日新聞』2002年12月11日)
- ・福田徳三 (1919) 「経済生活改造途上の一大福音」『改造』大正8年7月号
- ・藤原千沙 (2019) 「大原社会問題研究所と社会事業・福祉研究」(『大原社会問題研究所雑誌』第724号, 2019年2月)
- ・細井勇 (2009) 『石井十次と岡山孤児院——近代日本と慈善事業——』(ミネルヴァ書房, 2009年7月)
- ・松平みな (2015) 『穰の一粒』(愛媛新聞社, 2015年12月)
- ・松山城南高等学校編 (2000) 『松山城南高等学校創立110周年記念 愛と信仰の詩 初代校長西村清雄・ハマノ夫妻の生涯』(松山城南高等学校, 2000年12月)
- ・松山城南高等学校編 (2001) 『目で見る110年の軌跡』(松山学院・松山城南高等学校, 2001年1月)
- ・松山城南高等学校編 (2011) 『松山城南高等学校創立120周年記念誌 120年の軌跡——120年の愛・希望・未来へ——』(松山学院・松山城南高等学校, 2011年7月)
- ・松山市末広町公民館 (1984) 「濠州で活躍した高須賀穰」(『末広町史』松山市末広町公民館, 1984年)
- ・松山百点 (2015) 「高校の校歌を訪ねて(第11回) 松山城南高校」(『松山百点』第303号, 2015年7月1日号)
- ・松山百点 (2021) (『松山百点』錦秋号第340号, 2021年9月1日号)
- ・三浦豊彦 (1962) 「社会衛生史ノート(18) 労研饅頭」(『労働の科学』第17巻第1号, 1962年)
- ・三浦豊彦 (1976) 「新社会衛生史ノート(90) 労研饅頭」(『労働衛生』第17巻第6号, 1976年)
- ・三浦豊彦 (1980) 「労働衛生史学序説(第31部)——郵便事務能率の研究, 海女の調査研究, 産業医協議会(協会)の創立, そして労研饅頭のこと——」(『労働科学』第56巻第1号, 1980年)
- ・三浦豊彦 (1980) 『(労働科学叢書56) 労働と健康の歴史 第三巻——倉敷労働科学研究所の創立から昭和へ——』労働科学研究所
- ・三浦豊彦 (1991) 『暉岐義等——労働科学を創った男——』(リプロボート, 1991年3月)
- ・三浦豊彦 (1995) 「労働観私論(VIII)——食べるために働き, 働くために食べた時代——」(『労働の科学』第71巻第2号, 1995年)
- ・宮本常一・山本周五郎・楳西高速・山代巴編 (1960・1972・1995) 『日本残酷物語5 近代の暗黒』(平凡社, 1961年・1972年・1995年) (引用は平凡社ライブラリー, 1995年版より)
- ・三輪田眞佐子 (2005) 『三輪田眞佐子——教へ草/他——』(人間の記録167, 日本図書センター, 2005年2月)
- ・村瀬五十子 (1976) 『松山の名物男 六時屋 村瀬宝一』(非売品, 1976年12月)
- ・村瀬五十子 (1991) 「夫 村瀬宝一を語る」(日本基督教団今治教会『教会資料』第4号, 1991年9月7日発行) (日本キリスト教団今治教会(2009)所収, 21~22ページ)
- ・本井康博 (2002) 「熊本バンド」(『岩波キリスト教辞典』岩波書店, 2002年)
- ・森戸辰男 (1971) 「労働科学研究所50周年を迎えて——回顧と展望——」労働科学研究所編(1971)所収

- ・安田徳太郎 (2001) 『二十世紀を生きた人びと——安田徳太郎選集——』 (青土社, 2001年6月)
- ・山本紀夫 (2008) 『ジャガイモのきた道——文明・飢饉・戦争——』 (岩波新書, 2008年5月)
- ・労働科学研究所編 (1971) 『労働科学の生い立ち——労働科学研究所創立50周年記念——』 (労働科学研究所, 1971年)
- ・若月俊一 (1969) 「暗い谷間での挫折と臨床研究」 (川上武編『医療社会化の道標——25人の証言——』 勁草書房, 1969年7月, 所収)
- ・若林裕 (2010) 「(講演) 熊本バンド——明治の若きサムライたち——」 (同志社スプリット・ウィーク, 2010年11月, 同志社大学キリスト教文化センター, <http://www.christian-center.jp/dsweek/10au/1104.html>)
- ・渡部文也 (1985) 「日・豪交流史からみた愛媛——真珠貝採取漁業への出稼を中心に——」 (愛媛県立松山商業高等学校『研究紀要』第19集, 1985年)